

江戸名所圖會

一

W245

20

W245
20

松濤軒長秋編輯
長谷川雪旦畫圖

江戸名所置會

上 帙

博文館藏梓

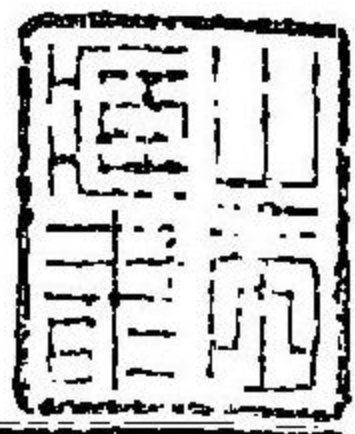
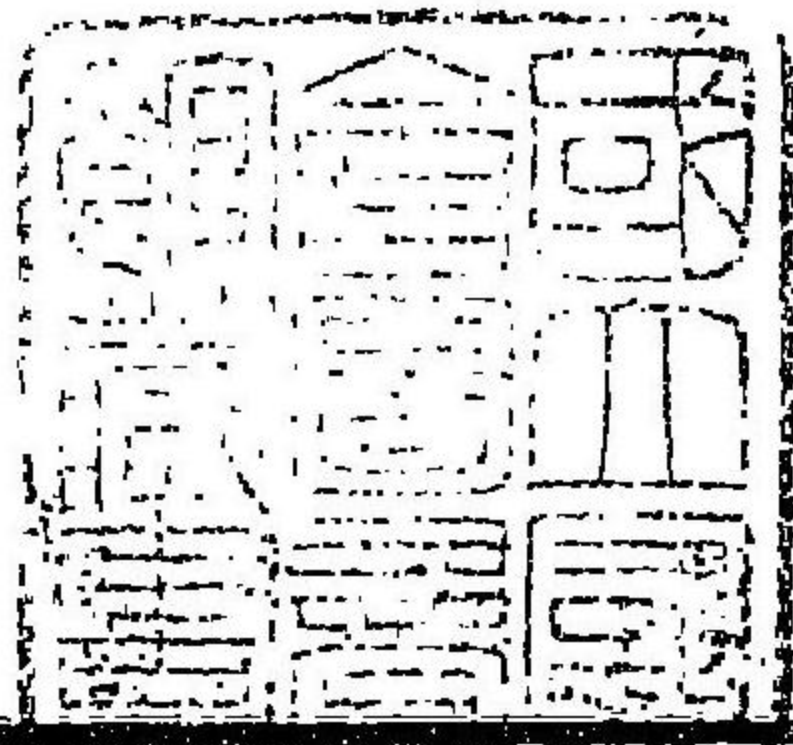
西村妙子



都名所圖會始出遠在余成童
時一閱之即謂此可以供臥游
矣則江戸亦不可無是輯也後
數歲聞諸西山大久保翁有齋
藤幸雄者有探勝之癖方撰江
戸名所圖會採擇稍遍描寫頗

56.10.-5

81W51774



都名所圖會始出。遠在余成童
時。一閱之。即謂此可以供卧游
矣。則江戸亦不可無是輯也。後
數歲。聞諸酉山大久保翁。有齋
藤幸雄者。有探勝之癖。方撰江
戶名所圖會。採擇稍遍。描寫頗

盡然獨病江戶稱名所者僅僅
不足俚指也。余謂凡名所之稱
本出於咏歌者流。蓋其設法謹
嚴。畫一。繼今有山秀水麗。足以
吟咏。而其不為古歌所取者。不
得稱之名所。是其所以雖世有

汗隆。要不失為雅馴也。然名者
實也。實者主也。主豈可以實加
損焉哉。矧秋里氏之撰。非惟所
謂名所而已。神祠佛寺。說係恠
誕。紮陌綺街。事涉猥瑣者。亦網
羅而不遺乎。矧復江戶之為地。

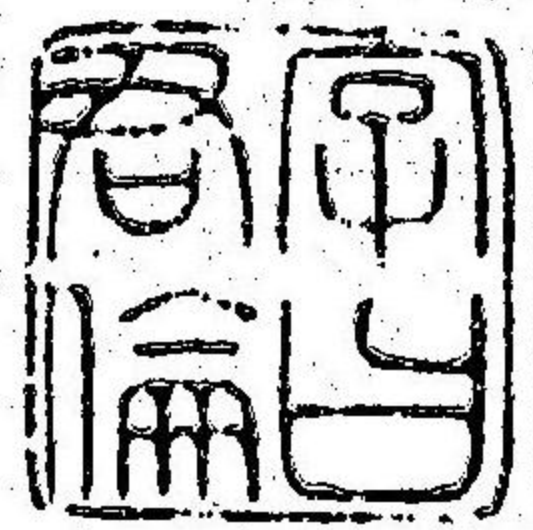
武野之曠。秩嶺之峻。湮流之永。
玉川之澄。絡繹邦域。霞閣思出。
之宜春。真土菴崎之宜。焯衿帶。
郊坳。其勝殆不讓上國乎。是亦
何病之有。翁頷而是之。既而幸
雄沒。翁亦尋逝。終不知其成否。

然而秋里氏所著拾遺與味河
泉攝及一二諸州名所圖會者。
陸續上梓。盛行於世。余於是乎。
悵然恨幸雄之輯愆。期失時而
又聞其男幸孝善。追其志。再搜
三索。蒐聚滋廣。猶未公於世。幸

孝亦以文化成。寅沒又遺托之。男幸成。幸成泣愛之。黽勉不怠。校讐極力。竟竣其功。間者幸成。突然抵門。通刺。出其金帙示之。且需序言。是蓋由余注日介人。促其成也。余乃一閱三歎。追念

與酉山翁言三紀於茲。喜悲交集。又憶幸雄。幸孝與酉山翁皆不觀其完成矣。然其所以歷年若此其久者。敬慎遺托。不敢輕舉。則死者而有知。必曰。予子若孫。相續能成吾志矣。抑畚會之。

撰固供卧游。尔以老童觀。非所以專示大方。若夫覽者。尤其不雅馴。則可謂不知類矣。余更為作者分疏其由。云天保三年閏月。冠山松平定常撰。



河三矣書言

海內地名。著於古人和歌者。宗祇澄月之後。攬而輯之。稱之為山川之險易。風俗之淋瀝。名物之同異。可坐而識也。吾江戶名所。顯於古人和歌。而晦於當今者。不少矣。多麼川調布。著於延喜式。霞閣載於武藏風土記。堀並井。彙於紀貫。

之僧西行之歌。皆名所之顯於古
而今失其蹤者也。及考古之士過
而訪之。林壑再啓其闕焉。泉石
每炫其奇焉。然無勝情者。則不
能也。齊藤幸雄有勝情矣。有
勝具矣。江戶勝區名。從彙於榛
叢。三墟之官。而不可識者。搜經

谷披窮林。或訪之。古老或徵之。
新碑又自史傳地誌諸家名所
和歌紀行之書。以及釋說野乘
苟有足以資考鏡者。必博採
總括。闡發於湮淪不可問之蹟
焉。其名所則著之。繪事收山河
於尺幅。駢萬象於筆端。亦可

以當卧遊矣。於是百年滄海之
餘區。英雄百代之故處。名士列如
之芳躅。榮然而復炫其奇。乃所
謂物不能自見。待人以章者。驗
之。未及成書。遂疾而逝。識者
惜之。嗣子章。孝克繼先緒。補之
未備。余先人與章。孝結交已久。

矣。嘗約為之序。而子孝享年不永。
亦繼而捐館。嗟夫。章存。胡為以稟
於性者。厚而所享於年。去獨為殊。
不獲痛惋也。及今。子孝能承遺誠。
以一人而任二世之編纂。卷帙既繁。
採掇亦博。而補稍悉。審契勩必。
當始克成斯浩澣之編。可謂章脩。

為人述者無憾矣。乃走不微序於
余。可去。余先人易簣。蓋八稔矣。而余
以薄技。浪代先人之任。大方之謂。
固所不免也。天保癸巳春三月

江戶 龜田長梓謹識

牧野信之

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the letter or a separate note. The text is dense and difficult to transcribe accurately due to the cursive style.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on a light-colored paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter 'P'. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on a light-colored paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter 'P'. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely Urdu or Persian, consisting of approximately 12 lines. The text is written in black ink on a light-colored background.

Handwritten text in a cursive script, likely Urdu or Persian, consisting of approximately 6 lines. The text is written in black ink on a light-colored background.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, consisting of several lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, consisting of several lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

多々なるの事候に
 是れは其の事候に
 可し候と云ふ事候に
 の事候に
 申す事候に
 心も松海新長村に

凡例

凡此編の次序ハ 大城を以て首とシ餘ハ南方小回環す
 近北斗七星の位に配當して都て七巻を以て全終す
 凡江戸の地ハ廣大盛壯にして名流言士の芳躰ハ蔚然と
 して使冊と照曜し琳宮梵刹ハ林の如く聯なりて悉く
 卷す不違なり故にその中にも由致河を撰て録す或は傳記
 亡ひて證と云ふれば其の主人の口碑も存するものを取て證
 中一或は無根の浮説やて言妖妄小説をその外に
 然りと雖人は不賒棄して傳録の外に其の今強し不添削
 評議を加ふ不核し其の姑くを傳と載て大伽藍と雖も
 未歴事實と亡失して詳なき事候に且小祠支院の類
 新建勅語のり其の悉くを其の闕きて没古博物の士不務ひ
 此日後輯の成る不乃ひて附載せんと欲するの事

凡方位と示すは、希世に備ふて某の東南西北を註りと標は
又左右と示すは、その地をむらむとす。傍の左右と云は、凡
の書を推して標準とせし。

凡引用の書全文と載せずしてその綱要のまゝと撮るまゝと
摘するもの、紙頁増多ゆゑに覽るに厭倦の心を生ぜんこと紙
恐るる所なり。況んは、佛刹の傳りたる所の佛像、塔、書畫
諸什品の類、并附會の流りて其質、澁すべし。又、社司
寺僧の言ひ傳りたる所、不任せし記、また或は、風土記の殘編、ハ
備書ありと雖、古來より世に傳へたる書あり、其略く是と
用ゆるもの、取捨をむりて、覽る人の意、不盡るもの。
凡神社佛閣の幅員、方位と圖すべし。其當りて、古今に形勢と
撰寫は、且、地景の間、以て時遊觀の形勢と繪る、其態度
風俗、後、飾容、儀あり、亦、古今の形容と、其と舊地、以て畫する

りの、各時と分りて、是れ地之の風光と、圖せし。其地、邦の人にて、
東都盛大の繁榮あり、と知る、其且、童蒙に親覽し、倦むる
か、りて、其、あらん、り、爲り、あり。

凡此地名所の中、武藏野、隅田川、二、而して、第一の勝槩と、以て、故よ
隅田川、と、其、卷、分ちて、六、七の二卷、記せり。其、卷、白峰
雲間、小峰、へ、東、卷、六、筑波の翠巒、曉霞、ふ、巖、て、山、水、の風致、備り
縦觀の美、此地、不、傳、り、依、り、其、卷、の全勢、と、眸、中、不、收、んと、欲、其
け、其、卷、と、對、照、して、其、全、局、と、知、る、べし。

凡真間の舊跡、以下、總の地、以て、武藏、あり、す、と、い、く、も、總、り、亦
利根川と隔つるの、ま、り、其、實、は、其、葉、集、以、降、り、其、芳、蹟、あり、且
文人、墨客、吟、遊、と、負、ひ、て、遊、節、と、曳、く、り、其、必、其、風、光、と、賞、と、
第一の壯觀、と、い、ふ、に、於、て、豫、會、志、の、例、不、做、ひ、く、保、せ、記、し、
け、此、地、内、不、收、む、覺、る、り、其、必、其、と、保、せ、し。

附言

此書ハ祖父ノ寛政中ニ編マシテ父縣麻呂ノ刑補文化の末少少
なり文政の今やむて上梓の功と終るぬ凡本年と終るる二十有余年
江都蕃昌ノ隨テ神社寺院境地沿革するの頗多一白の小畑も
頃更ノ壯業する大社とを儀の神卷も巍然たる莊嚴をみれり
との少くは或ハ祝融の災ハ罹りて樓門田廬と燒失一礎石の
存まらぬ類具廢校奉す人々の悲しむるも時と改るる能は
る今時の村は是るの多し思ふ所のふらふらあり

齊藤月岑識

江戸名所圖會卷之一

天樞之部目錄

- 武藏國號基 日本武尊秋父崇倉心武器と收りし圖
- 江戸始元 大江戸東南の市街より内海と望の景
- 元且諸侯登城場 吹上河庭
- 八代曾河岸 松原小浜
- 浅籠橋 梅林坂 舊地
- 天王寺旅所 大橋町
- 常盤橋 道三橋
- 浮世小路 日本橋 同魚市
- 福田村舊址 白髭橋 舊河
- 今川橋 八橋一覽圖
- 護持院舊地 荒洲 坂田町
- 神田明神舊地 本石町時の鐘 堀留 同臨河原
- 田安臺 桑土明神舊地 坂田町 中坂 九段坂
- 小川町 基立 神田川
- 御茶の水

水道橋 二條橋

昌車橋 昌車橋

藍澤川 藍澤川

柳橋 柳橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

駿河臺

神田川

神田川

清水如水宅地

吉東町旧地

江戸橋

天王清旅所

天王清旅所

天王清旅所

天王清旅所

天王清旅所

筋違橋

丹後殿

柳東封疆

沙草橋

杉森橋

加茂川

日田市

澄の渡

茅場町藥師堂

御東先主居宅地

隨見を浦

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

新大橋 新大橋

任吉明神社

寒橋

織田有樂齋第宅地

尾張町兵衛

飯倉神明宮

飯倉神明宮

飯倉神明宮

飯倉神明宮

飯倉神明宮

飯倉神明宮

飯倉神明宮

澄島

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

西本願寺

三田 綱坂 網坂 湯水 小山神明宮
 春日明神社 月波樓 三田八幡宮 聖坂
 功運寺 濟海寺 竹葉寺舊址岡古事
 飛塚 祖來先生墓 魚藍觀音堂 御見坂
 伊四子藥師堂 牛小石 高輪大木戸 七月廿六日給付之宗
 高輪ヶ原 泉岳寺 如來寺 太子堂庚申堂
 福有河 常光寺 寶壽寺 經社社
 高小稻荷社 東澤寺 八幡宮 谷山

武藏

東海道小屬と和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡不在と云く
 武藏國上古八東山道の内に入る光仁天皇の空龜二年辛亥冬十月己卯
 大政官奏して東海道小屬せしむるより 贊日本紀不見えたり 久良都筑多磨
 橋樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗比企 横見 埼玉 大里 男衾
 幡羅 榛澤 那珂兒玉 賀美 秩父 葛飭 等以上二十二郡あり 輪木抄
 那珂等の三郡と加へ葛飾と除て廿四郡とす詳るは貞享二年丙寅三月利根川の
 西を割て武藏國小屬せしむる昔八本所葛西の邊淺草の川と國界として川より東の地六
 一圓小下総國ありと右云々今葛飾郡の半を割て利根川の以西を武藏の國此
 葛飾郡といふ東を下総の國の葛飾郡といふ和名抄武藏國管二十一とあり葛飾郡
 今是を加へく二十二郡と和名抄葛飾と加止志かと訓て同書多磨も多波と訓たり
 古事記牟那志小作の舊史記胸刺小作 葛葉集小年 同くむとと稱せ
 其義ハ風土記抄小武藏の國秩父の嵩ハその勢ハ勇者の怒り立ら
 ず日本武尊此山小東夷征伐の祈願をこめらひその後東夷盡く平治
 せしその武器を秩父岩倉山小納めよりくこの國とむとと稱せしと
 かり重後 稱徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を獻し公
 卿の奏せし言小載武崇文の祥多しとありて此國を武藏の字を以嘉名とせし
 續日本紀稱徳紀云神護景雲二年六月癸巳云武藏國橋樹郡入飛鳥部吉志五百國於



日本武尊東夷征伐
 の時武具杖杖父
 岩倉山ふ收夕山
 是武藏國号の
 濫觴なり

倭健武容猛
 征西又伐東
 腰間十束劔
 草薙偃威風
 春薙子

同國久良郡獲白雉獻焉即下郡御講之奏云雉者野良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光照臨之符國号武藏既呈戰武崇文祥一とあるハ
半邪志の三字と好字は改め二字は定め武藏と書て志の文字を畧るれ
一より此白雉の瑞みつと武藏の二字を祝して奏する詞より今の名ありとあり
東照宮様當國は大成とあり鴻業の基を闡とあり一あり
四海竟干戈の勞を忘れ万民長太平の化小浴もつとあり乃是
天意のあらうつむる所中々國の勝も自ら昇平の御代小應とあり一
家集 物名むと一

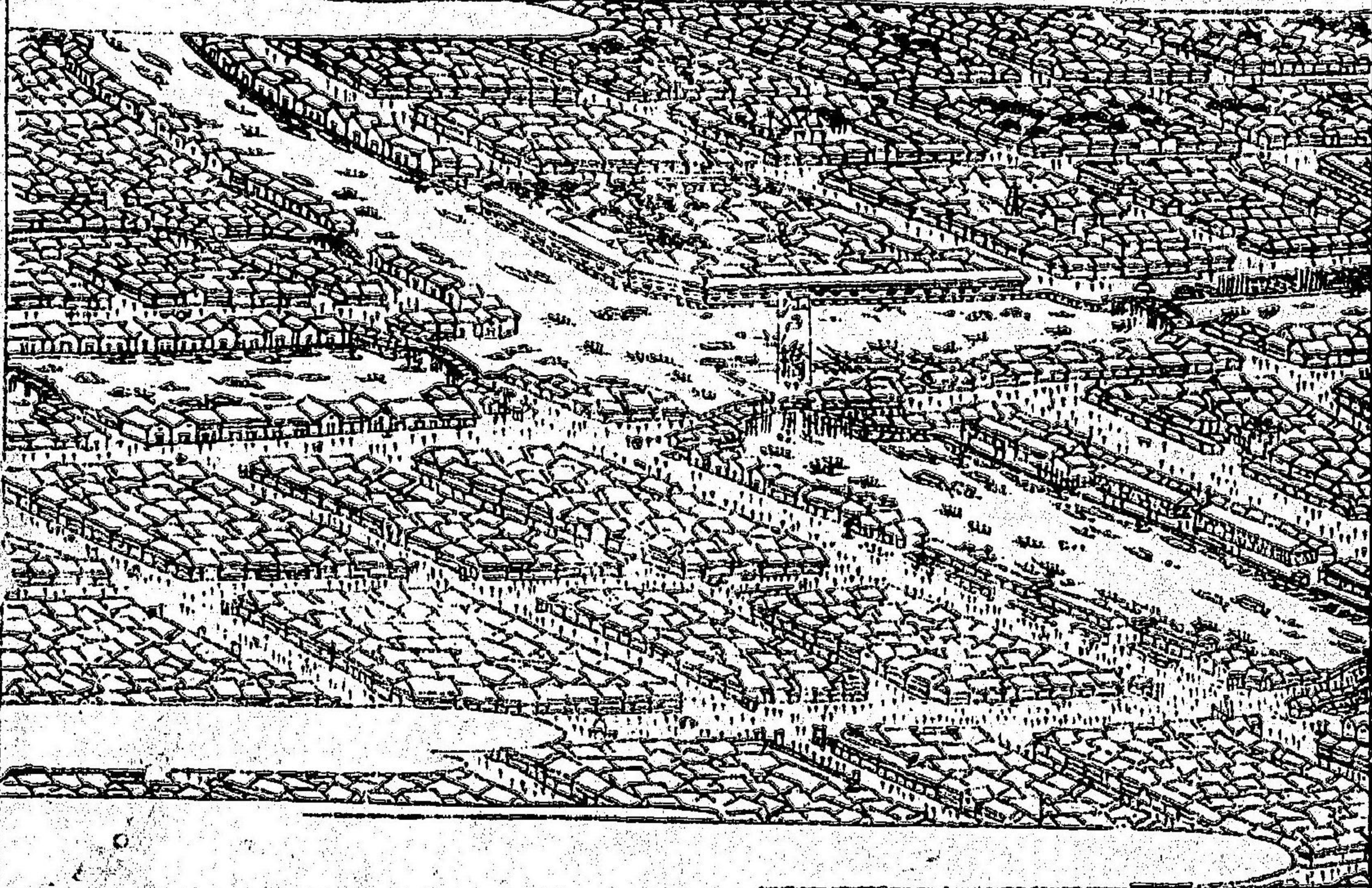
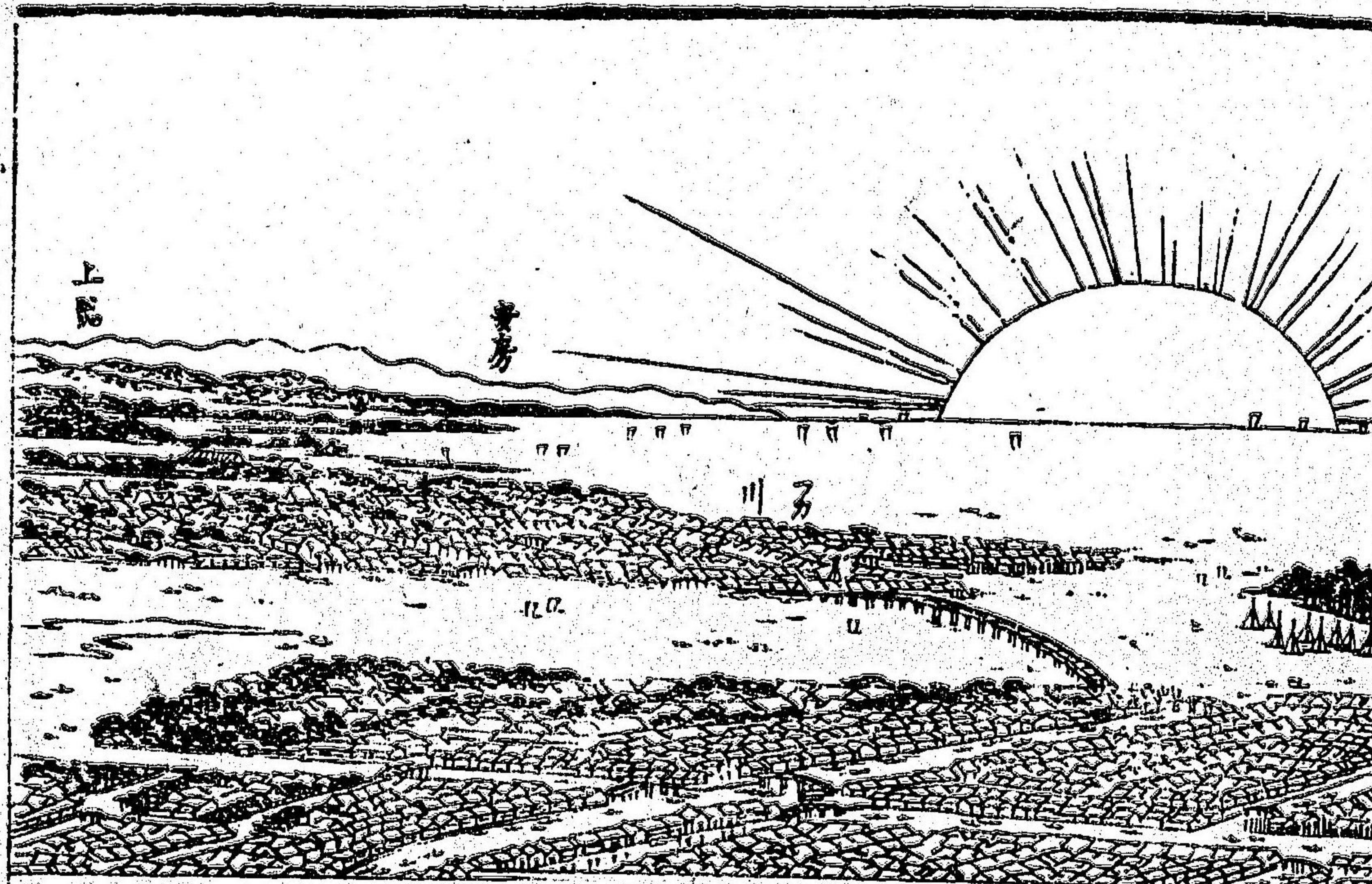
おぼせしとくはわりの遠くありとあり 芥本丸

江戸 豊嶋郡峽田領とに其封境往古ハ廣くわつとに似たり

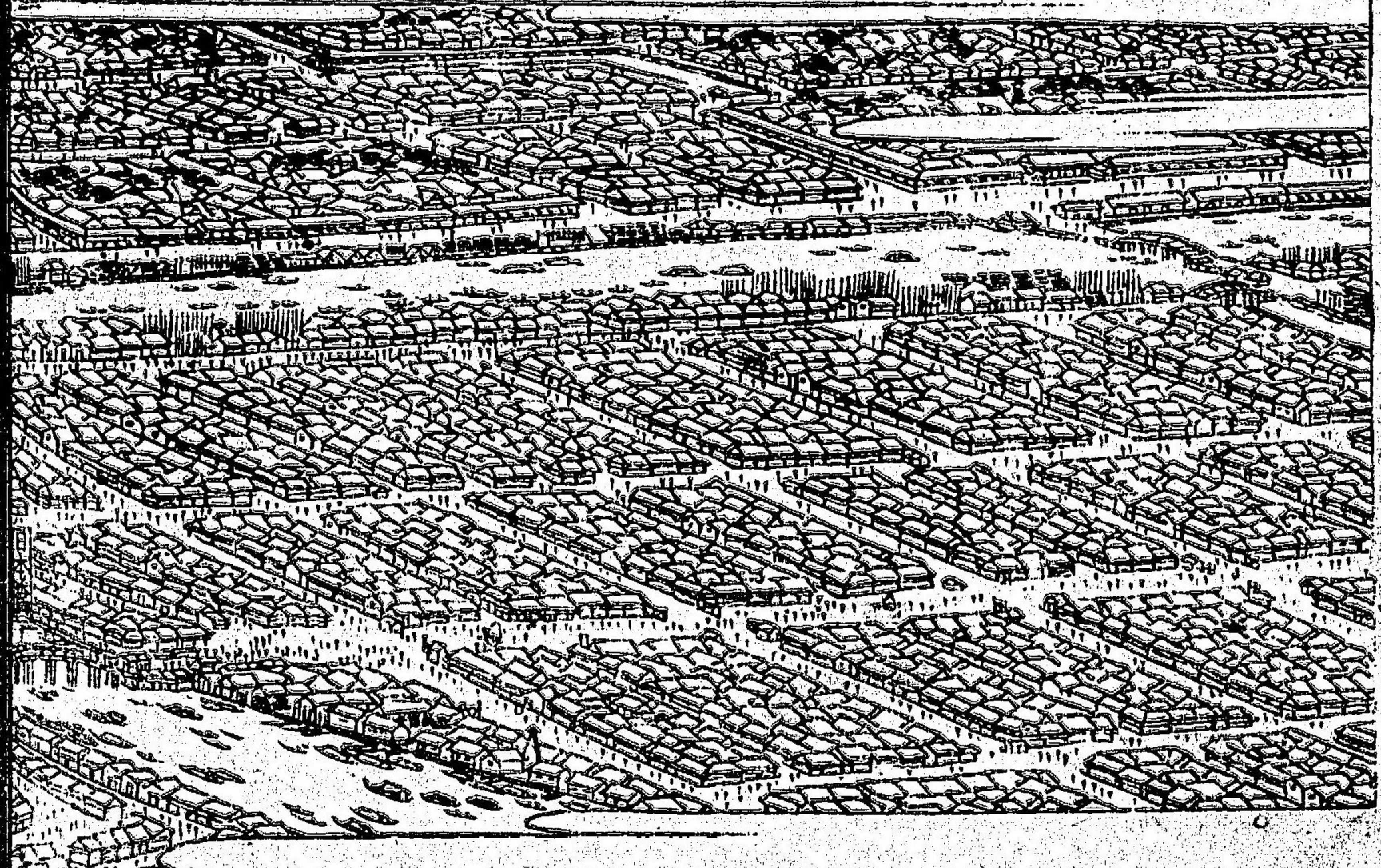
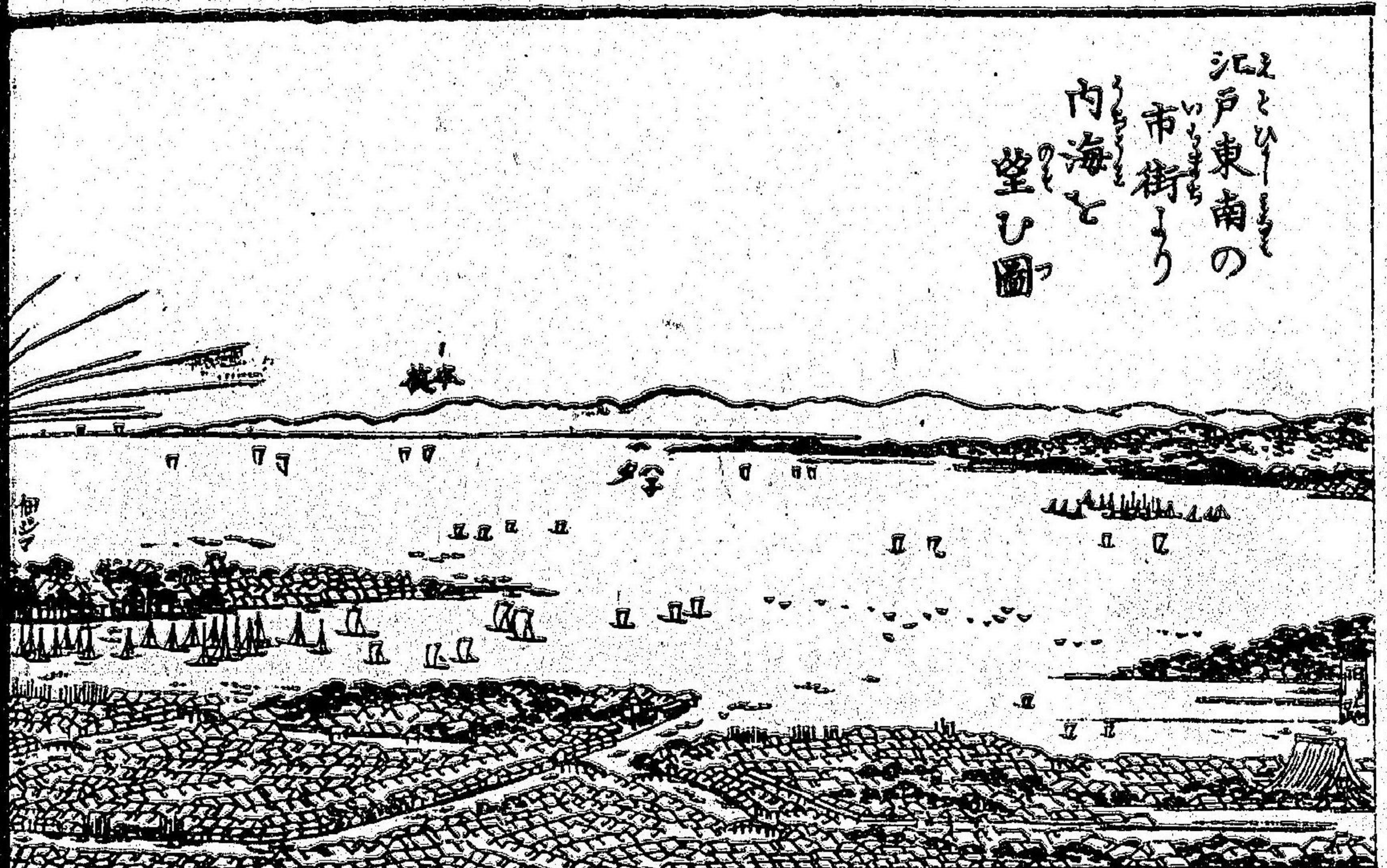
白石先生の説ハ江戸ハ庄の名あり一云云按中古庄と唱へハ郷のゆゑのあり
卿里共ハ位登と訓を令義解云九五十戸為里と云然る時ハ佐ハ秩登ハ処の畧
一と廣大なるの意ハ 武藏國風土記ハ在土小作傳云此地ハ大江ハ臨
故ハ江戸と稱せりとの 甲陽軍鑑ハ江戸の辺と中武藏と唱へとあり義
ある時ハ江戸の地ハ平川と云重長領せり南向亭ハ平川一水と
隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺のガハ神田郷なりと云今平川と云今
飯田町の下よりつゞく入郷の地ハ飯田郷なりと云又同説ハ今の所城の
地ハ江戸と云

江戸大城基立 人皇百三代 後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
大夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道准 持資の傳第五
條下ハ 當國荏原郡品川の館あり一時勝地とあり以て豊島
郡江戸の地ハ城營を闡むと一康正二年丙子經始一長祿元年
丁丑巧成と道灌と移り住と 江戸名所記の説ハ父資清入道
持資相繼ぐ居城とすとの説ハ詳なり無倉大草紙ハ長祿元年
四月上杉修理大夫持朝入道武州河越の城を取立らる太田備中入道ハ若井の城を
取立同左邊太夫ハ江戸の城を取立るとあり是を證とす一又波書云十代田
室田祝の里とありと云とあり城地とありと云一説ハ十代田村田室田等の三

江戸城の早ハ呼れり一故地の惣名とあり江戸の名ハ此類なりと云云寛永二十年
橋のめりまめりとの一冊子ハ扱へりやと白雲の葉末ハもみ津草と打越ゆけと
ほつとありむとありの江戸ハつとありとあり上の意ハ江戸ハ江戸を以て
江戸とありとの封城今ハ廣大なる意とあり 天正己降江戸を以て
御居城の地とあり一故小日を重ね月を追ひ益繁昌ハおあり
今ハ怪偉拾里ハおあり都と江戸と稱せり萬國列侯ハ藩
邸市麩商賈の家屋鱗差一と縦横四衢ハ充滿一ハ万戸
千門覺を連ねり一実ハ海陸の都會也と扶桑第一の名境とあり



江戸東南の
市街より
内海と
望し圖



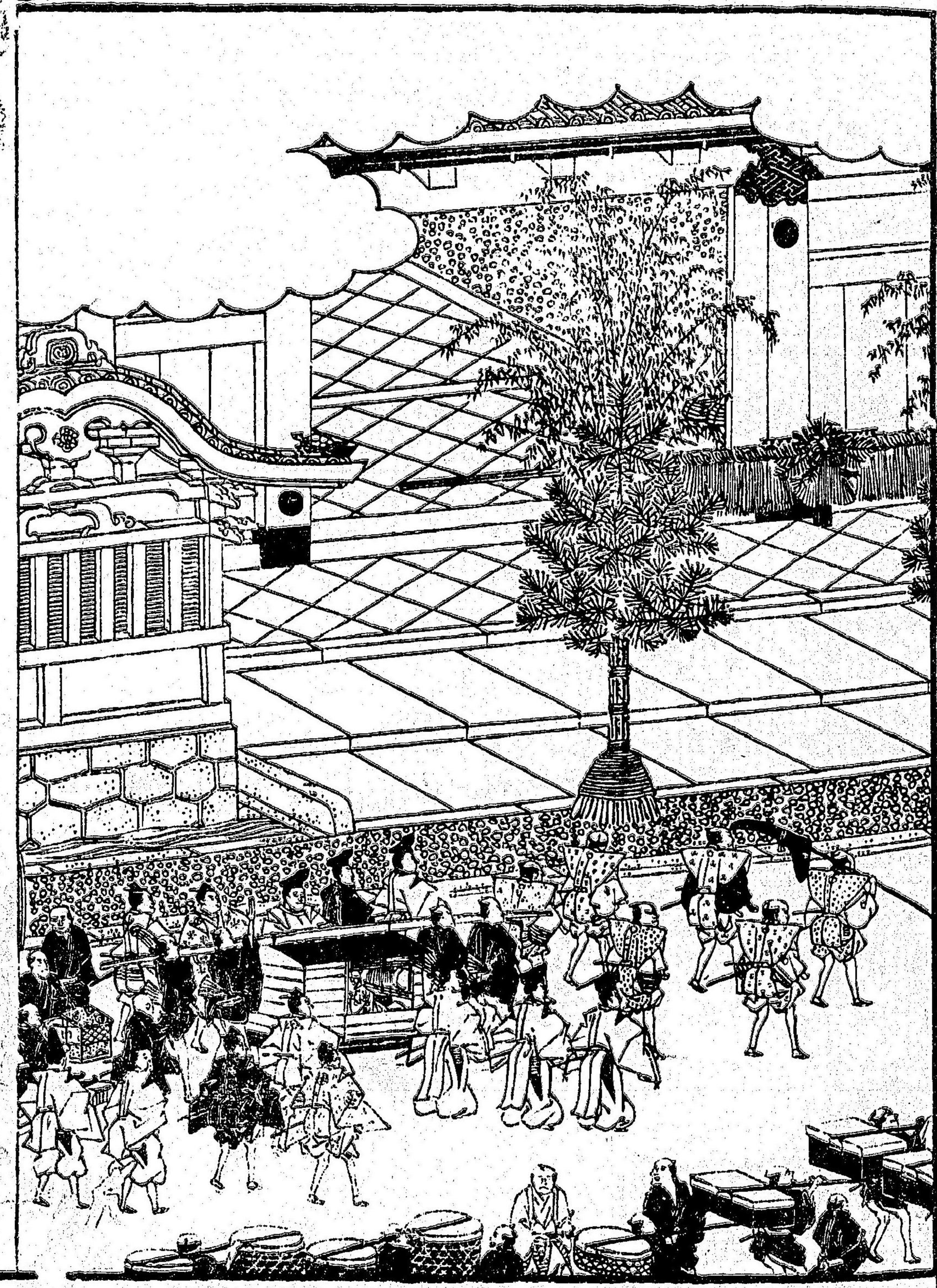
武州江戶河越岩井城墨と築りてありて一あり武州地也
或ハ人名とす大田道守支那籍云天正十一年
城中は幾所の室とありて軒の南を静勝と号し東を泊城と号し西を合雪門と号し
東奥萬里船とありて古人の詩を引きて然る文明十八年丙午持資諒害せり
大田道守の文中に詳かり江守記
同豊後守とす此城を守らむ
武藏志料曾我兵庫乃の子
次郎自胤とす菴置とあり接し項長尾景春武州より入る共を惟とす道灌
戦引よひありて鎌倉よりありて流江戶の城は是等の人と居置りありて
其後定政の子同五郎朝良同修理大夫朝興共相續て此城を守り
大永四年甲申 五月 北条左京大夫氏綱より攻落され朝興大
敗走し河越の城より移る是より後ハ氏綱家人富永神四郎 小田原記
政直速山四郎左衛門 小田原記 某多と城代とす
民直よ至る迄とす四代の間北条家より属す
是間遠山富永両家より代
然る永祿の始遠山丹波守富永三郎左衛門兩人北條國府に戦死す天正の頃ハ北条治朝
遠山左衛門守城代より同十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政も小田原に
同族より其の河村村部以兼 天正十八年庚寅秋七月其家没せり

より己来永く
御當家の 御居城と定まられ同年八月朔日江戸の大城へ
台駕を移らせり其頃迄は僅てかりの城營とす一慶長年
間御城廓の地を廣くせり唯今の如く巍々然とす萬世
不易の大城とハなるとりたる

江亭記 寄題 江戸城 静勝軒 詩序 公所 肇業 也 自
武州 東戸 城者 太田 左金 吾道 灌源 公所 肇業 也 自
關流 籍甚 比來 騷亂 以欽 固一 命之 雄也 威愛 相兼
風三 州之 謂二 安危 係于 武一 之欽 固一 命之 雄也 威愛 相兼
一州 城可 謂二 安危 係于 武一 之欽 固一 命之 雄也 威愛 相兼
舟車 之固 會他 州郡 唯武 一人 夫城 之為 地海 于公 才三
峭立 固以 繚垣 者數 十幾 以加 夫城 之為 地海 于公 才三
脉石 以繚 碧架 巨材 十幾 以加 夫城 之為 地海 于公 才三
門石 其壻 磴徑 左材 十幾 以加 夫城 之為 地海 于公 才三
中閣 若于 直舍 翼其 側而 樓障 庫庑 軒廠 之屬 其
為屋 者若 東西 望則 阻野 瀛嶺 天庑 如三 萬文 屬
白瑠 屏風 者若 東視 則則 濛海 舒行 几案 萬茵 布
碧瑠 野者 與南 海接 與天 連野 寬舒 皆公 几案 萬茵 布
一碧 瑠瑠 野者 與南 海接 與天 連野 寬舒 皆公 几案 萬茵 布

元且諸侯
登城之圖

藩邦玉帛此朝宗
關險何須百二重
四海道通會瀚游
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲迥
郊第春分淑景從
回望蔚蔥佳氣裡
車如流水馬如龍
服元番



物斯遊耳以故軒之南名靜勝東一名泊西名舍雪
萬狀拍斯則一可一旣者雖互出更野而風之如西呈焉
凡三焉東瀛者天霞之所與也遠而波曙今鳥嶼分嶺
月之皎如者紫之而所與也遠而波曙今鳥嶼分嶺
背曠兮固巒紫之而所與也遠而波曙今鳥嶼分嶺
其叢入海商旅地小所與也遠而波曙今鳥嶼分嶺
出沒於竹樹烟雲之際高橋下繫銅越之擢鱗集故
合日施成市泉珠犀香之至鹽魚漆桌危筋膠相
之旗衆無卒泉珠犀香之至鹽魚漆桌危筋膠相
室收天此人以彙區有別者人於之所養帶已其發而
矣慮其躁而失常矣吾杜戶瞑目於後乃定其於神乃
則清者成歌而詞和者成政元氣為馬道其於神乃
窮之神與氣合而詞和者成政元氣為馬道其於神乃
不勝寒而冲熱躁之天正機也為道其於神乃
於一能偏而非其能也唯泊然清熱而解之曰成而
公之非盈冲而後無所不勝也唯泊然清熱而解之曰成而
與公相爭而相戰者未之起也所謂不勝則正矣今非
者公相爭而相戰者未之起也所謂不勝則正矣今非
舍重泊松者為花老人謂蜀中之遊能傳人以所及而

以此地同此景至老為名在公乃於天下其流傳
亦者六十年矣丙申夏適介以請及左要屬能言告
二有子題于後遊于授以指一室幸于所歌擊述以
予日也予未嘗東遊允蓋予之序乘也明八年丙申
吳昇也遂以所見蕭巷龍統而為之序文也明八年丙申
秋八月羣玉峯叟蕭巷龍統而為之序文也明八年丙申

傳聞靜勝軒中景四面窻扉一野闊青丘吞蒂
芥天晴碧海無期泊松處關心西嶺成堆壘火如從遠
樹來我老無期泊松處關心西嶺成堆壘火如從遠
去鼓聲中樂受降聞君延客日臨應風帆多少載詩
去鼓聲中樂受降聞君延客日臨應風帆多少載詩

籍々威名關以東又知天下有英雄鼓擊不起邊城
籍々威名關以東又知天下有英雄鼓擊不起邊城

江戶城高不可攀我公豪氣甲東關三州富士天邊
江戶城高不可攀我公豪氣甲東關三州富士天邊

雲連雪嶺水連吳城上軒窻開畫圖最愛似留行地
雲連雪嶺水連吳城上軒窻開畫圖最愛似留行地

古壯遊之士有志於四方者必以經山左野
之陽田登而望之然則左者遊之武也
年為時頃間太田左金源矣蓋武之關左者百不英也
是為江戶城而十萬應卒如國吾源矣蓋武之關左者百不英也
武州甲兵四城而十萬應卒如國吾源矣蓋武之關左者百不英也
為城於甲兵四城而十萬應卒如國吾源矣蓋武之關左者百不英也
險萬虜不是進亦在雄據其要而擊之壘城也
景寔天爵之進亦在雄據其要而擊之壘城也
此有臺榭之進亦在雄據其要而擊之壘城也
曰泊齋曰特舍雪軒其附庸也若軒為勢此城以邦也
四則此西齋曰特舍雪軒其附庸也若軒為勢此城以邦也
一登此軒也乃四觀志之當士城也東而南一有偶田河
託其容之軒也乃四觀志之當士城也東而南一有偶田河
軒東遊之詩也乃四觀志之當士城也東而南一有偶田河
屬中東遊之詩也乃四觀志之當士城也東而南一有偶田河
求正宗不陳躬歷其地者命同師諸人之當士城也東而南一有偶田河
未且後題不肯辭前告者知者統正觀一予詠也欲而後今遠金遊之勝河
在希世靈八語金龍集丙申八月吉書而子若插之村尚

寄題左金吾源大夫江亭

士嶺衝天東海瀾靜中勝景畫中看一山暮得么
鵬載泊前灣晚照殘

華構臨江天宇低北帆南揖日斜西髻端雪白漁竿
客萬頃玻璃可釣齋

華館相攸主亦賢江亭茲試武城絃東復漫戶波結
地西嶺當窻與蕙夫赤壁林誇前客玉樓十二洞

士嶺之東湘水北一亭新架有高城閭東勸
茂經籍滿床羅俊英鷗渚驚汀春畫靜竹籬茅舍暮
光晴丹青難畫圖外惟幄運籌張氏青籬茅舍暮

關左形勝之雄以武為冠武者大國也其山可百里
而兼要嶽者江戶武之冠乎距相府連慎可百里
為綠蕪白沙並海以武之冠乎距相府連慎可百里
佳木蔚然日將晚也翠登丹崖然以高峙珍卉
也攀躋以爲中秀迺左金吾源夫之所築新城
山水歷々以爲中秀迺左金吾源夫之所築新城

以翼然乎其中東武之一都而白揚一益二之亞
以翼然乎其中東武之一都而白揚一益二之亞

以翼然乎其中東武之一都而白揚一益二之亞

也東望則平川縹緲兮長堤緩迴水石瑰偉兮佳氣
鬱芬掩映乎數十里瀛海補大境化神人所幻云後
則滄洲其前則百谷與出沒會而原楚野蒼天坤日
一何方夫當關則東而無所與安也近世乃知此地
惠仲山甫城于東方襟內人武以集之置間燕之公
公柵之於斯外謂與仲山甫襟內人武以集之置間
曰靜勝可謂與仲山甫襟內人武以集之置間
羣山隔岸雲霧縹緲洗天以翠而見朝以自然
人之畫也清旅鷗鷺所治也龍亦雜處以自無
桂葉舸經舳舻如織而龍亦雜處以自無
寔黎矣哉締小亭曰雅也弗語而於花也
襟宇滿西指以詩鳴其道者或慕齋公之逸韻或於
是湘中僧即美以寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而
羨其山水之麗也於寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而
成章亦寓最也於寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而
也公之求邪覺也於寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而
文何有邪覺也於寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而
聊以解其然覺也於寄詩魚目珠燕石其首玲瓏而

文明六年六月十七日江戶城道權奇合と與於すこを江戶奇合

心敬 資雄 平盛 音譽 道灌 珠阿 孝範
資俊 好徑 快象 ト巖 資常 宗信 瑞泉坊
惠仲 資忠 長治 以二十七人判者ハ心敬僧都
講師ハ平盛ナリ

孝範家集 二月十日 聖廟法樂 靜勝軒太田

宗長東土産 於て 建武三年 乃 終り 一の 郡

上杉 建芳

一日つ 相 向 會 席 なり云

道灌

此和歌ハ太田道灌靜勝軒の合會亭のありて詠

宗義東國紀行

日天氣のくく江戸の城はほほんと遠山甲斐守の

りもあれは種あつて先旅宿の事なされたりありあつて其主

宗三とて和泉塚をあれの時直ぐおきて一城より使明後日

上徳國へ出陣の侍ももむりか一を懸望しけり色

故障ぬいとの由再往なほしむ不及了簡あつれせしむ

昼川くさり始られよう一頼の爲とて軍を取めし

玉もいひも花ふあけけりふりり耶

此城の遠望下み運籌帷幄中決勝千里外これあり

りし朝一はもさうあり又六日大田越前守豊秋の

中本さうして小田原をめる約とやなりせし

明日息休を齎出陣ありて夜討とてけり也

御為同心ありし機心ありて豊秋の軍はけり

花よとて

いそしたるまじりなり一はとて

軍軍をいひより運秋のりそとて

えいりかく例の駱駝のりか

るしとてあれは富永とて

しほつちあり又小田原より

あつちり掃除なすれ

入江かけし

あひ舟をりり

あつちり中あつちり

ししとて東のあつちり

帰帆むし

夕月夜益あつちり

國よとて

鳴り出陣又守入録進一かきあつて一各異見の事

てまのわらひを思ひしり七日月あつてつらき軍勢あや

しつらふと云云 始十四日とあり天文十四年三月なり

吹上御庭 旧名を局澤と云 披は吹上といは江戸に臨むて高き地と云ふ

あり又江戸小石川氷川明神の南の地旧名を吹上といふ

松原小路 田安御門の内なり 昔此地松原中あり一を結城黄門公

御館を建られた木立の御館と呼ぶ

せし和奇よりある名つてたり或人云此南は増上寺の黒本堂の御堂

あり一とあり依りてある名つてたり或人云此南は増上寺の黒本堂の御堂

林坂 平川口御門の内あり文明十年の夏太田持資或日一室ふ

まりく午睡の中靈夢を感じ翌日菅公親筆の画像を得て

勸請一梅樹数百株を栽依り梅林坂の号ありと云 菅公親筆の

平川御門あり平川天満宮是なり三巻の平河ハ往古上下と云

と云ふ一あり由小田原北条家の古文書より云ふ

八代曾河岸 和田倉御門の外に御垣端をいふ天正以前此地

波打際ゆく漁者の住家のみなりと云 其後日比谷町と云て

看店多き町屋と云り一慶長の頃ヤウスハチクンと云

異國人は此地をいふと云 名新出ハハ重教ノ作又江戸産ハハ重訓と

と云り事跡合考ハ弥養子ノ作と云り或人云慶長十九年甲寅九月一日

御館の御垣端をいふと云り又云一書ハ耶揚子ハ吉利支那

と云ふあり一とあり和倉御門の東御溝の餘水と落す此所迄潮と入あり

龍の口 和田倉御門の東御溝の餘水と落す此所迄潮と入あり

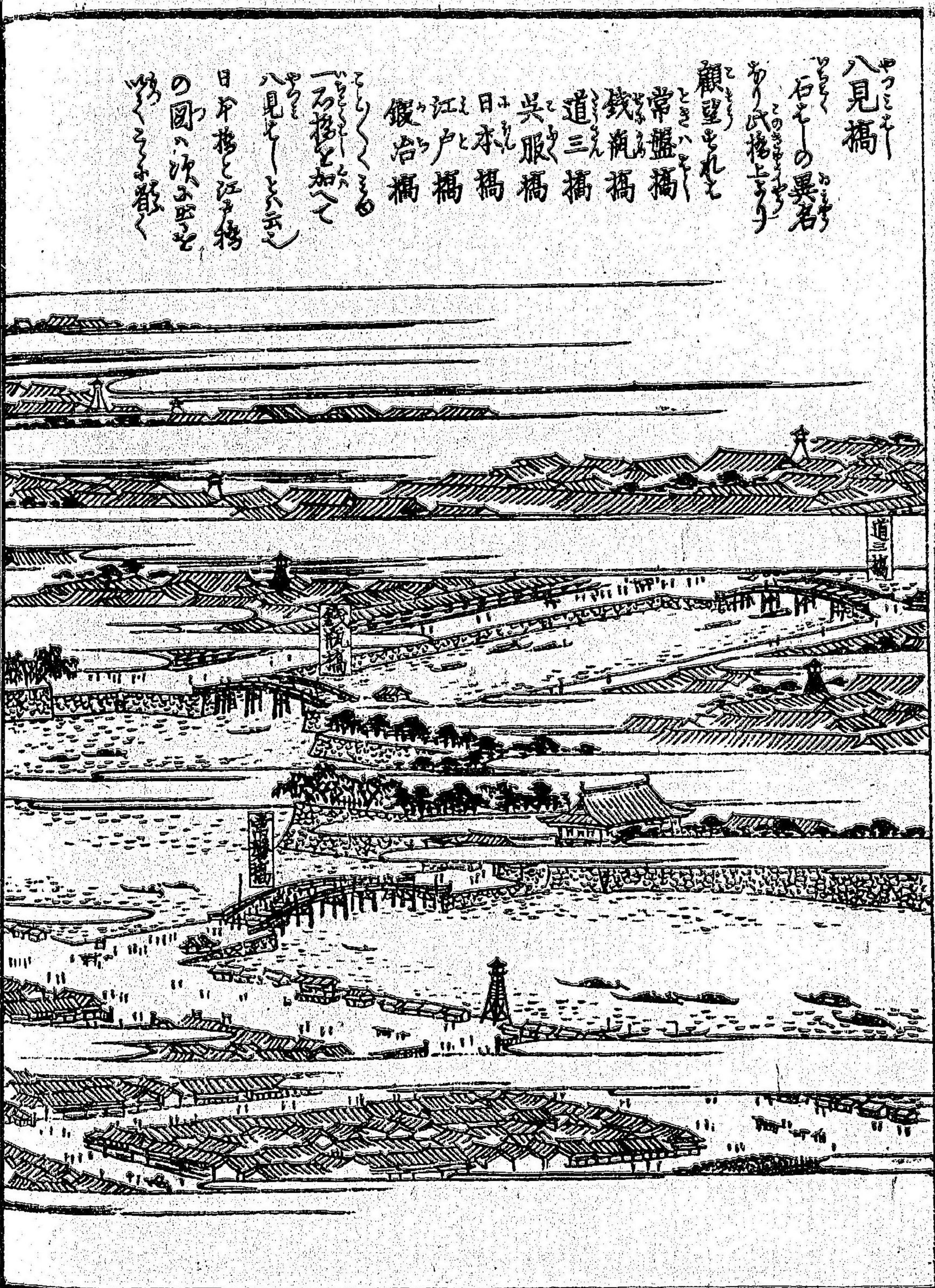
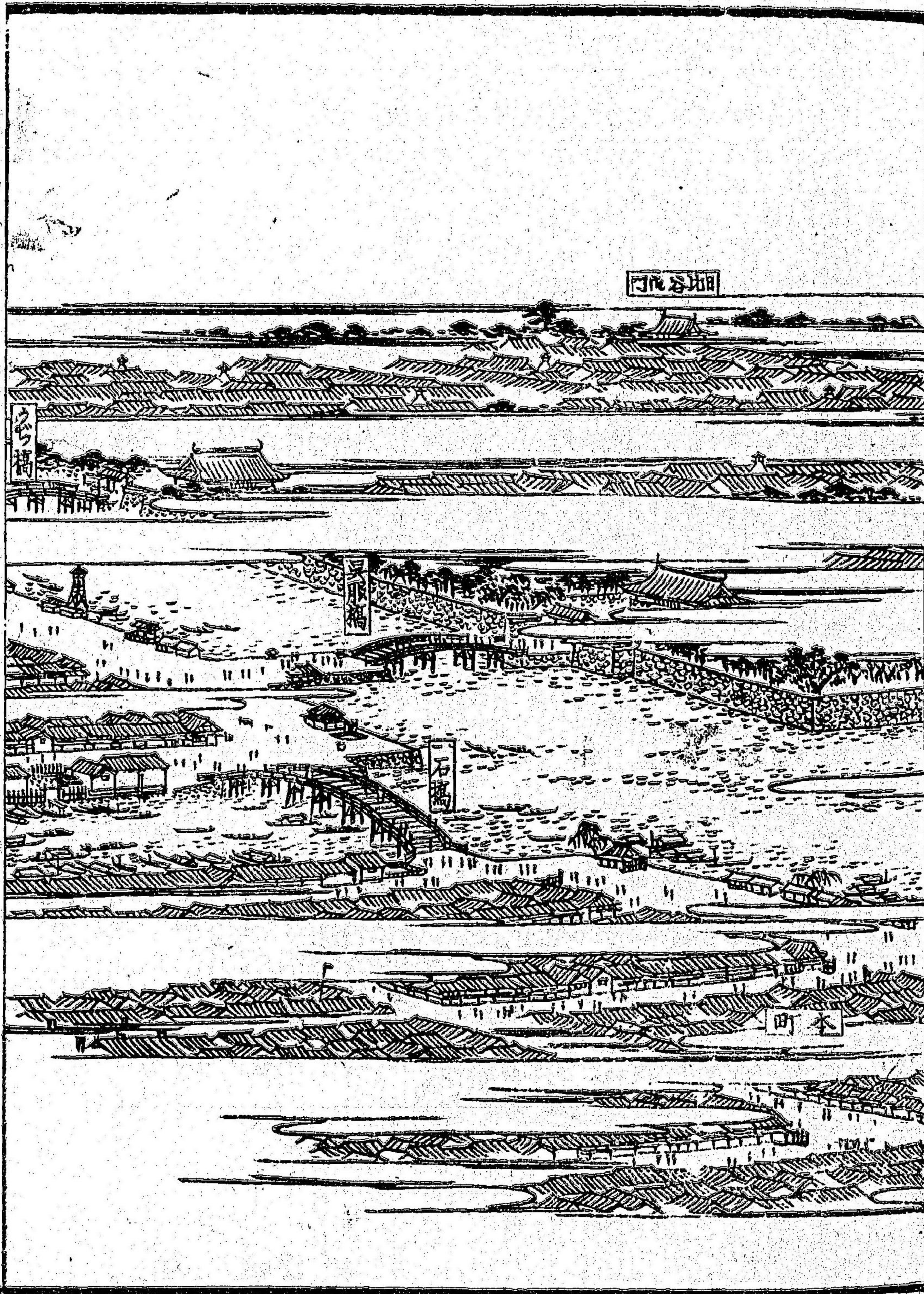
昔此辺を平田村といふと云同所南の角松平右京兆第宅

の内は平田明神の社あり 祭神詳今ハ又此地其昔を蒲生

飛騨守氏郷の宅地なりと云 菅公の龍虎梅竹と糸あり

菅公の龍虎梅竹と糸あり

菅公の龍虎梅竹と糸あり



ヤツシキ
 八見橋
 石七の異名
 あり此橋より
 顧望せられ
 常盤橋
 銭洗橋
 道三橋
 呉服橋
 日本橋
 江戸橋
 鍛冶橋
 一石橋を
 八見せしむ
 日本橋と江戸橋
 の間ハ此の
 町に在り

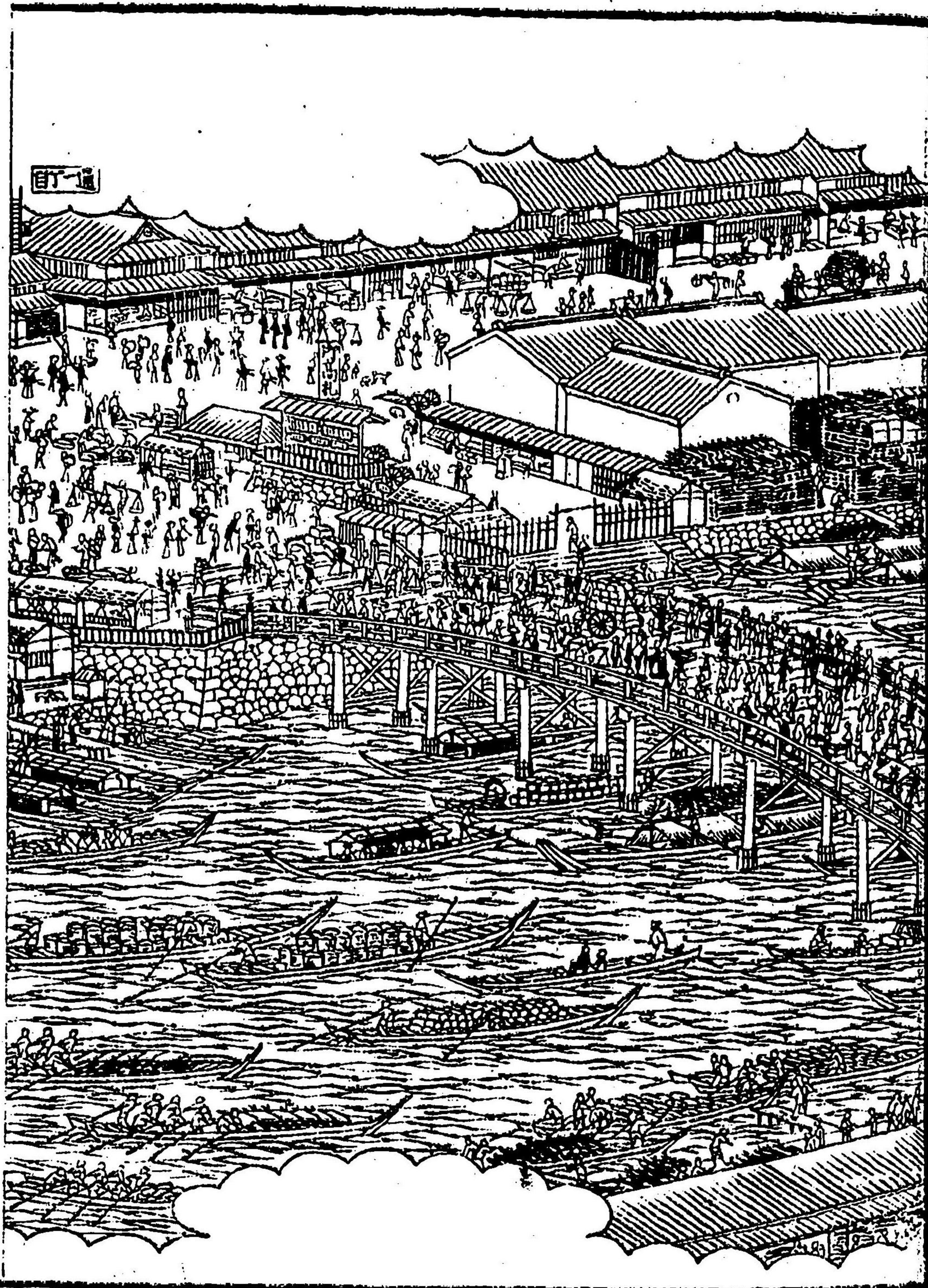
道三橋 細川矣藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋は号
とす昔此橋の南は典藥寮の所醫官今大路家の茅宅あり
とあり 改め此所を道三河岸と云ふ 延宝四年内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と
俗間傳云ひし時 大將軍家道三とありて以て遷す
伊智あり一此所堀をめぐるあり其道遠く中上これハ其後此
橋をわけしありてなり 江戸名所記に道三河岸南北より道三を平
住宅と云く寛文江戸繪圖に此所を慶次郎橋とす軒をのりて
翁云道三河岸所入園の項榊木渡世の者軒をのりてありて後年彼地武家の
後とも今の榊木町是なりと云

銭瓶橋 常盤橋と呉服橋の間より昔初々此橋を架けし時銭の
入る瓶を堀得し故号とす一説ハ昔此所あり永樂銭の引替
ありて此所銭替橋と唱へしなり又江戸總鹿子と云く昔此地
を銭を賣る所の市とありて毎日二回替せし後ハ銭賣多かり
これハ互ハ渡世の爲めとありて仲間と定めける依り

其頃銭買と云くと云くと云云 江戸鹿子江戸雀等の冊子は銭瓶
と云く寛永十八年印本をみるに無きもの冊子は天正十九年の夏伊勢与市
の者銭瓶橋の辺は洗湯風呂と一ツ立る風呂銭ハ永樂一銭なりとありてハ
銭瓶橋は作らざりし也

常盤橋 御本丸の大手より東の方本町への出口中へ御門あり
橋の東詰北の方ハ御高札を建てる金葉集ふをかへぬ松
よとありてありての常盤の橋はつる藤波といはる古寺の
意を松平の御称号よりありて御代を賀しなりての号ありと云
按此橋の旧名を大橋といひ侍入るハ誤なり慶長十二年の江戸繪
圖ハ今の御本丸の下衆橋を大橋と云ふてあり同圖ハ常盤橋とハ
浅草口橋と云ふせり依り常盤橋の大橋はありと云ふをみる

一石橋 日本橋より二丁半西の方同一川筋よめる此橋の南北は
後藤氏両家 金座後藤在三軒
呉服所後藤徳助 の宅あり其昔五斗と云ふ秀
句あり俗ハ一石橋と号けしなり 寛永の江戸繪圖ハ後藤橋と
ありての音トウなりと云ふハ五斗と
云い又此橋上より日本橋江戸橋
呉服橋銭瓶橋道三橋常盤



日本橋

自是太平無事客
 東國行盡幾山川
 武江城上慶雲靜
 日本橋頭人氣燦
 翠帶紅衣常絡繹
 玉鞍金轡每駢闐
 相如題柱知何意
 富貴從來元在天

山崎蘭亭



日本橋
魚市

橋鍛冶橋を顧望する。故に此一石橋を加へて共八橋と云

と云。此橋の南詰東が河岸と西河岸との檜木河屋多く住むる所

日本橋 南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西のが御高札を建

らる欄檻葱宝珠の銘も萬治元年戊戌九月造立と鐫す此

橋を日本橋と云ふ旭日東海をわたり親見する所なり号ると

しと云。車路合考云日本橋の御高札は慶長十七年の後決とあり其

慶長十一年の御高札は八月武州江戸日本橋高札を此地江戸の中央

諸方への行程も此より定めむ橋上の往來ハ貴とあり

賤とあり絡釋と云ふ間斷なり又橋下を漕つて魚船の

出入且より暮に至る迄敷々と置く此の橋詰を室町一丁目と

云ふ厄崎屋又右馬場御所の町屋なる由は是れ御高札の御高札

御高札の御高札は御高札の御高札は御高札の御高札は御高札の御高札

魚市 船町小田原町安針町等の間悉く鮮魚の肆あり遠近の

浦より海陸のけりありなく鱗魚をらる運送し七日夜も

市を立ち甚賑なり

後金と云ふゆへんを月一の儀 芭蕉

祇園會津旅所 大傳馬町二丁目の乾の角あり 女角

此屋の住す此橋より年々四月十九日の夜ハ 其宮所ハ神田明神の

地より祭神ハ五男三女なり 毎歳六月五日本社

より同十日ハ神幸あり同八日帰興を又小船町を旅所と云ふ

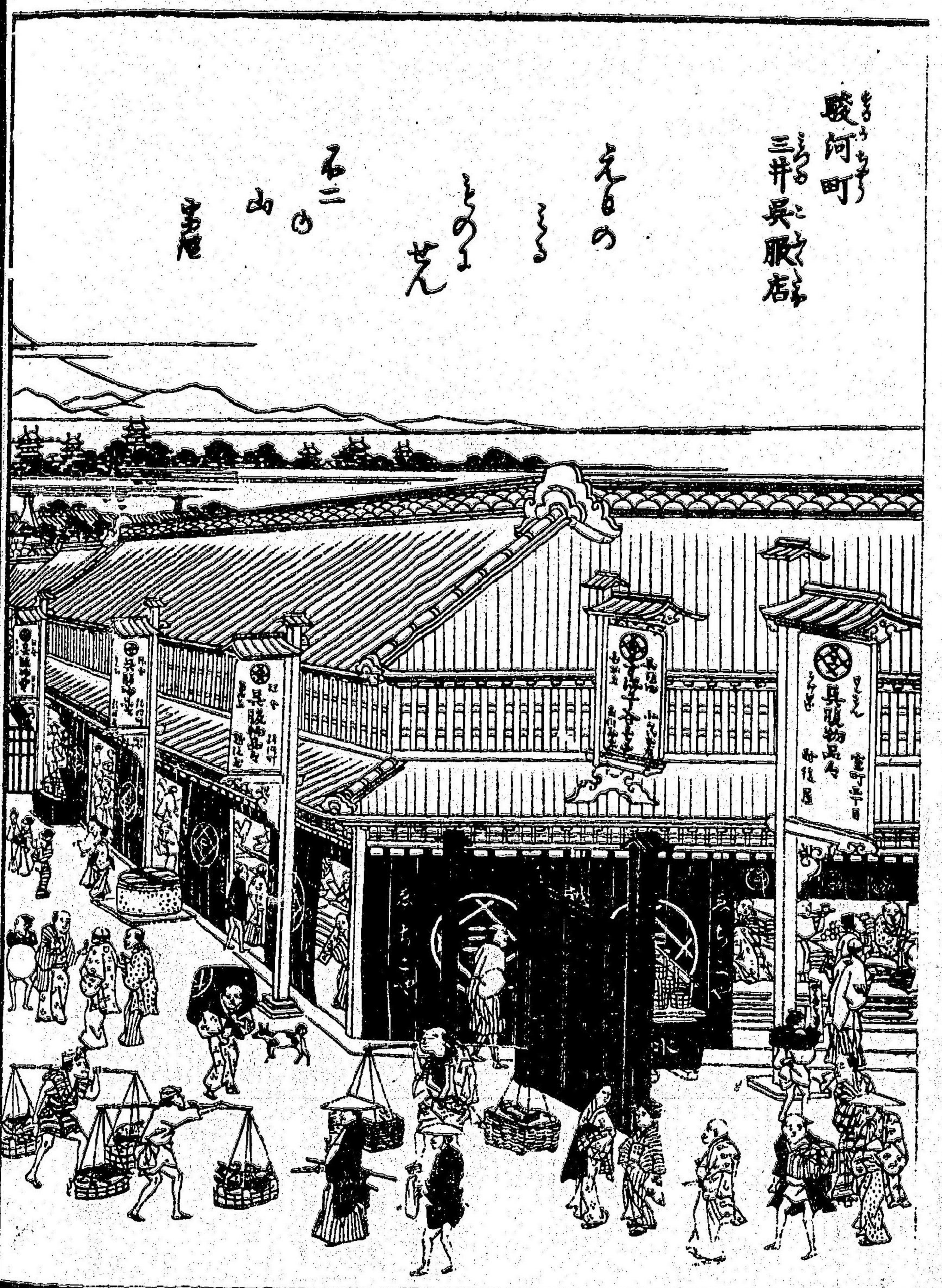
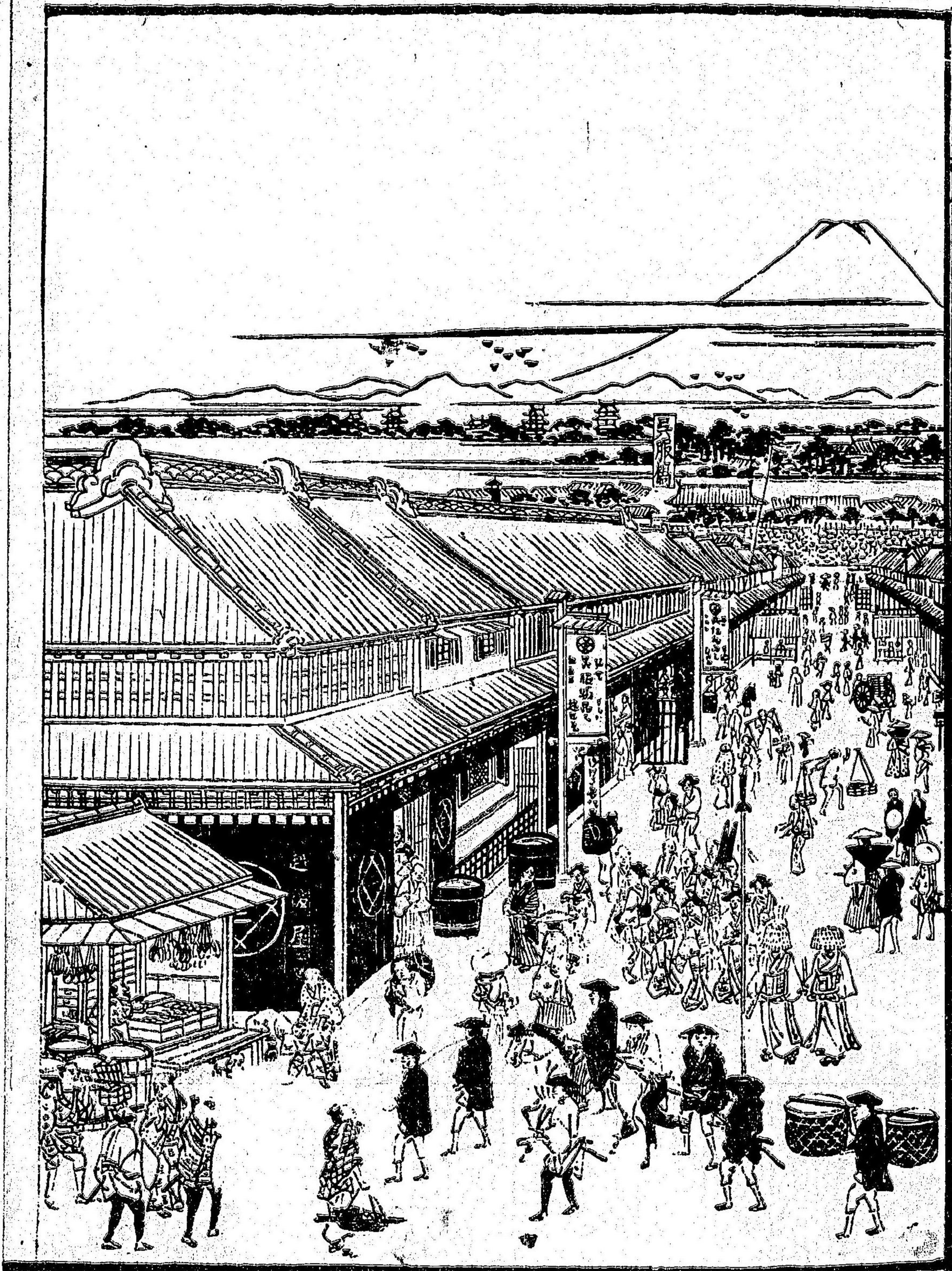
その同十日ハ神幸あり同十三日帰社あり是も宮居を神田

明神の社地ありて祭る神ハ奇稻田姫中々是を本所前と

称せり何れも旅所は遷幸の間八日夜参詣群集して一時の

賑ひなり

通町 北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中



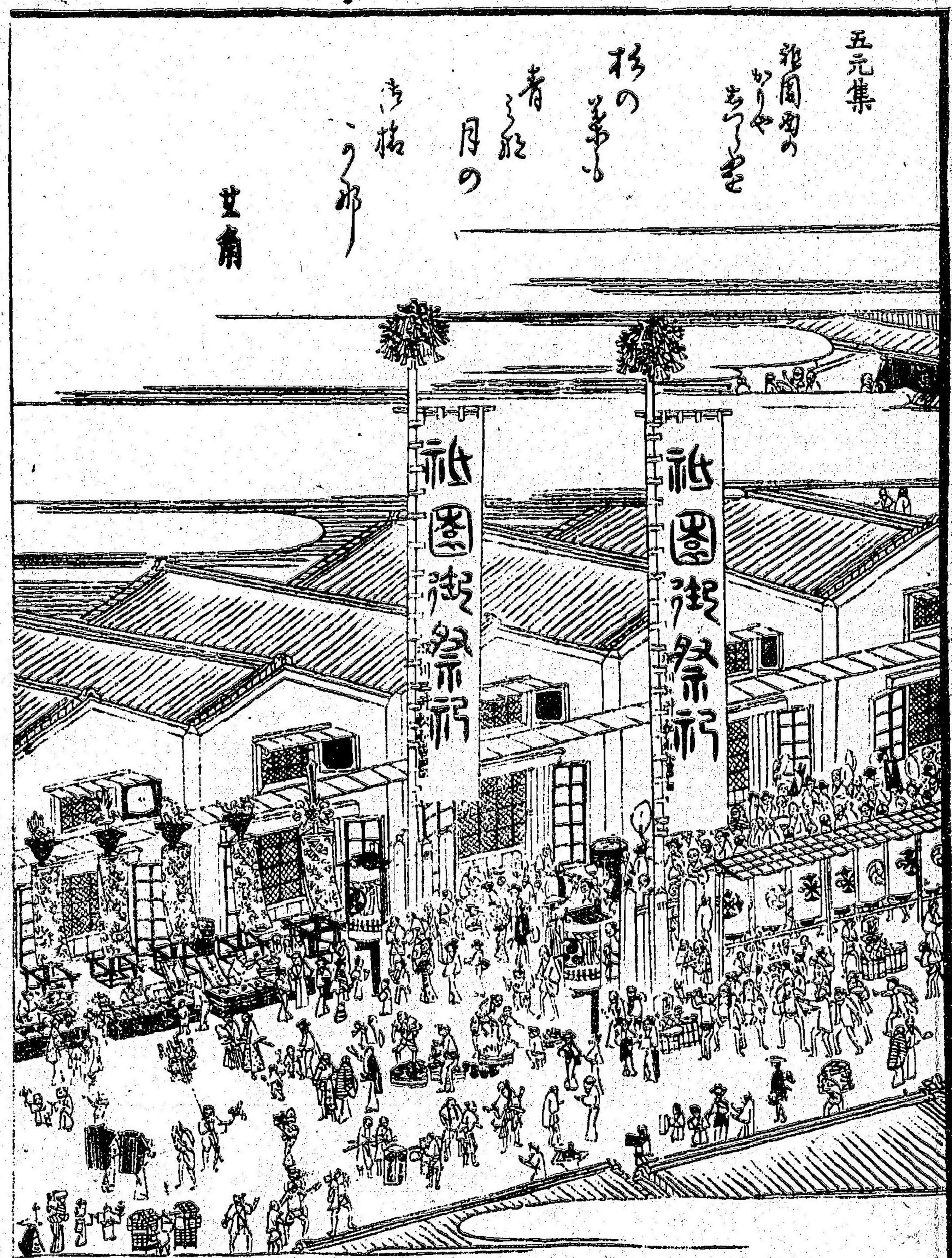




橋京橋新橋を径く金形橋の辺迄の惣名ゆへ町幅十間餘あり
 淳世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云ふれと其故を云ふ
或人云置表淳世町産南へをせり云ふりよと云ふ又ハ風呂屋遊女の居り
 十軒店 本町と石町の間の大通をいふ桃の佳節を待得て大
 裡離裸人形を道具を比麴軒端を並へり端午の宵人
 形菅蒲刀をふ市を立ち其賑ひをり彌生の雜市をねと
 り又年の暮に至れハ春を迎へ破魔弓手毬破胡枝を商
 共ハ其市の繁昌言語は述尽すべし其美ハ大平の美とも云
か 駒込杯も雜市あれとも此の市ハあると
 時鐘 石町三丁目の小路より辻源七といふ者是を役す此鐘
初ハ御城内よりありと云ふ 其餘都城の鐘より有る候時を報ふる
川町上野芝切通市谷ハ備目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等なり
 銘曰 宝永辛卯四月中院鑄物柳大工推名伊豫
 藤原重休



法園會
 大傳馬町御旅所
 五元兼
 天王の九巻本と
 料と
 里のよ
 の
 教
 うた
 其角



五元集

社園の

まつり

杉の

まつり

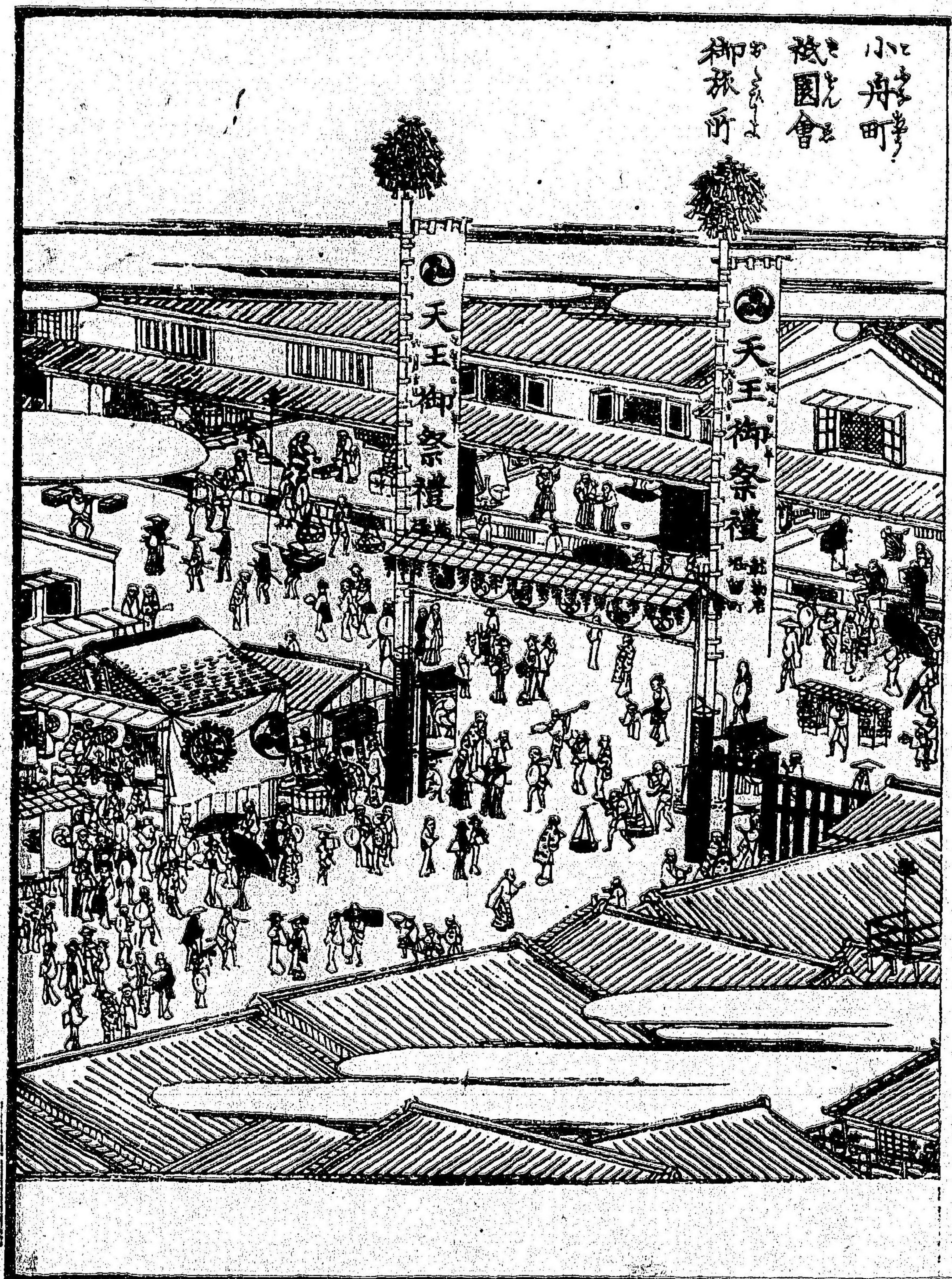
若

月の

まつり

の

並角



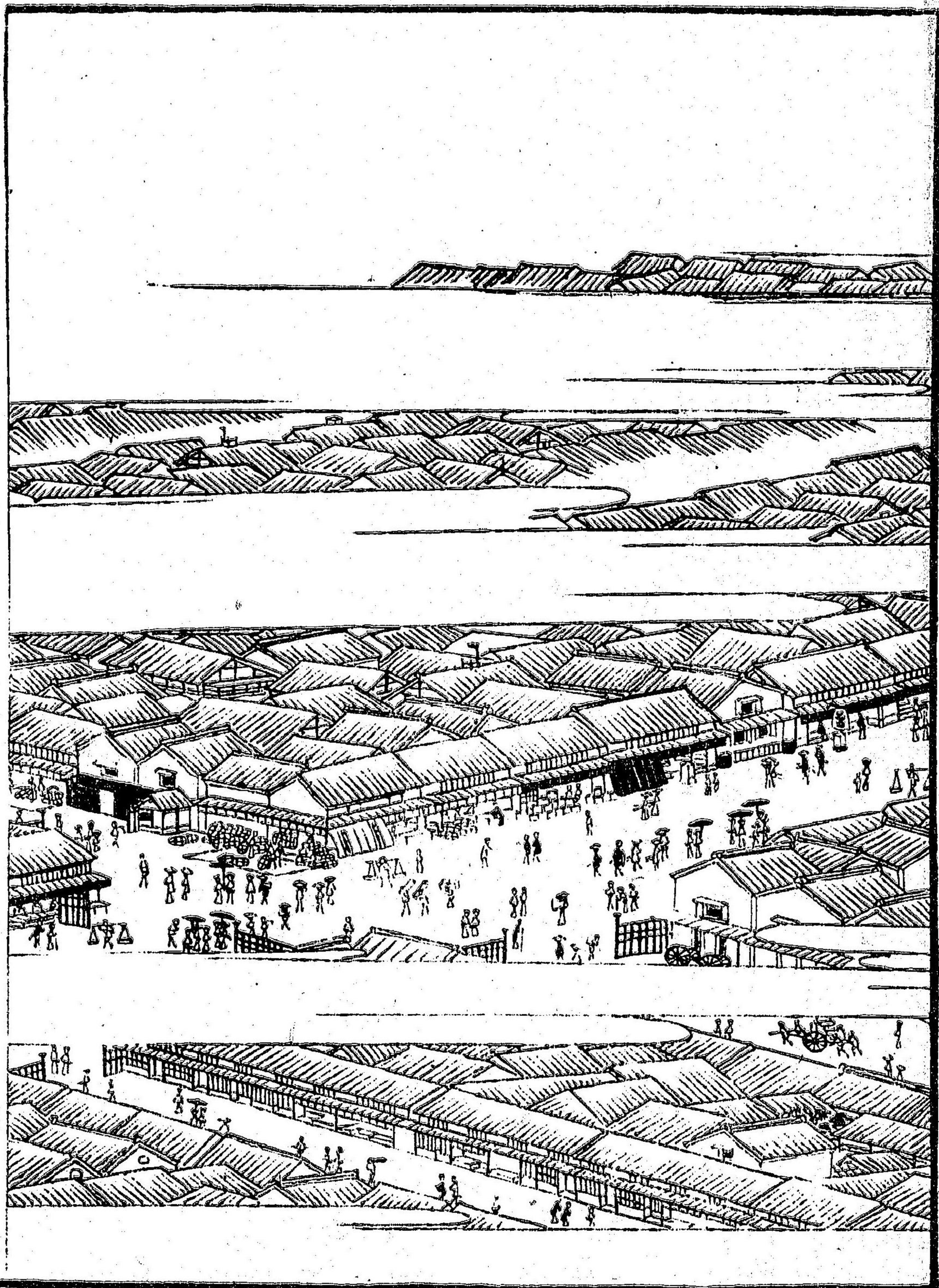
小舟町

社園會

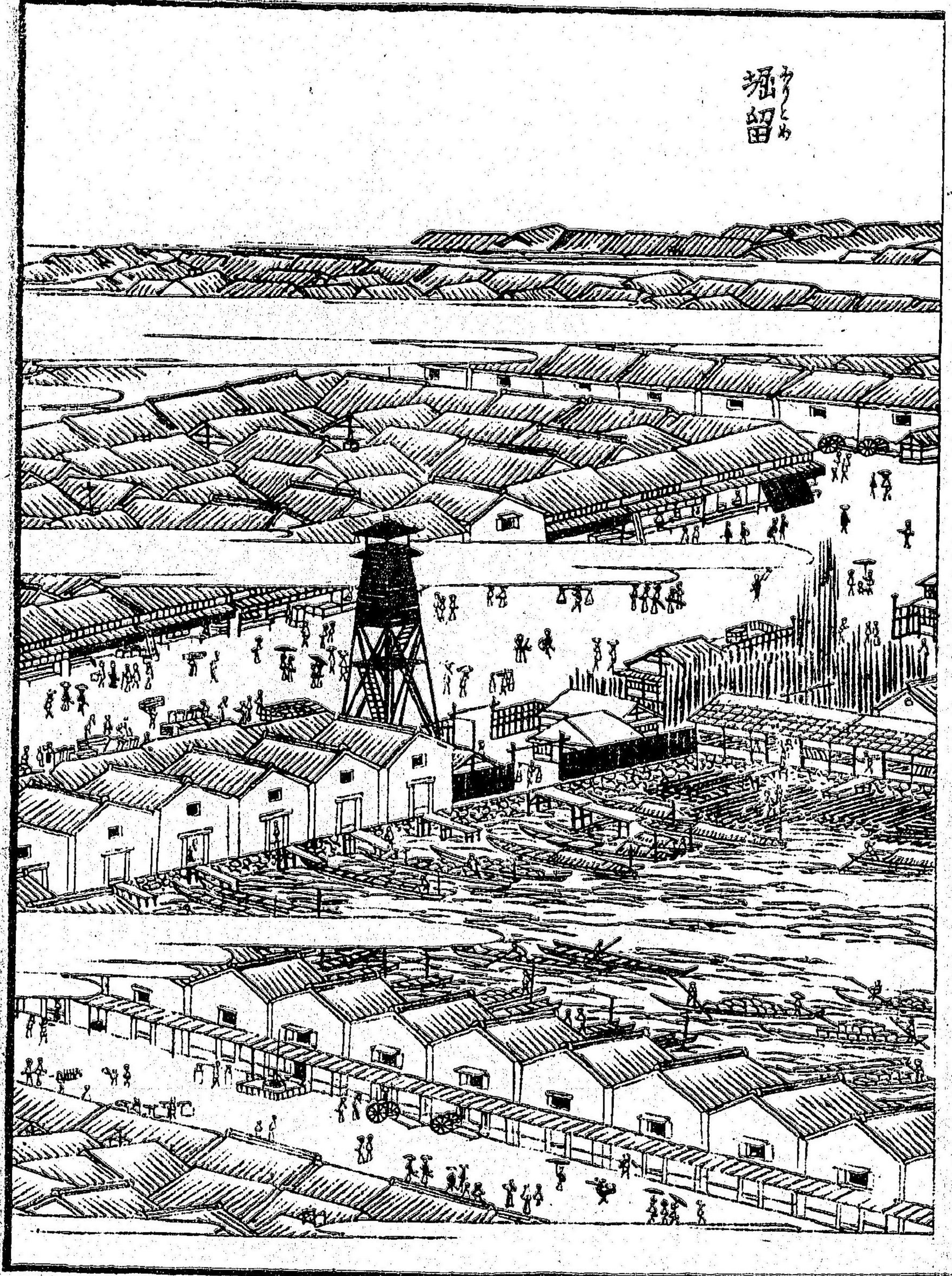
御祭祈

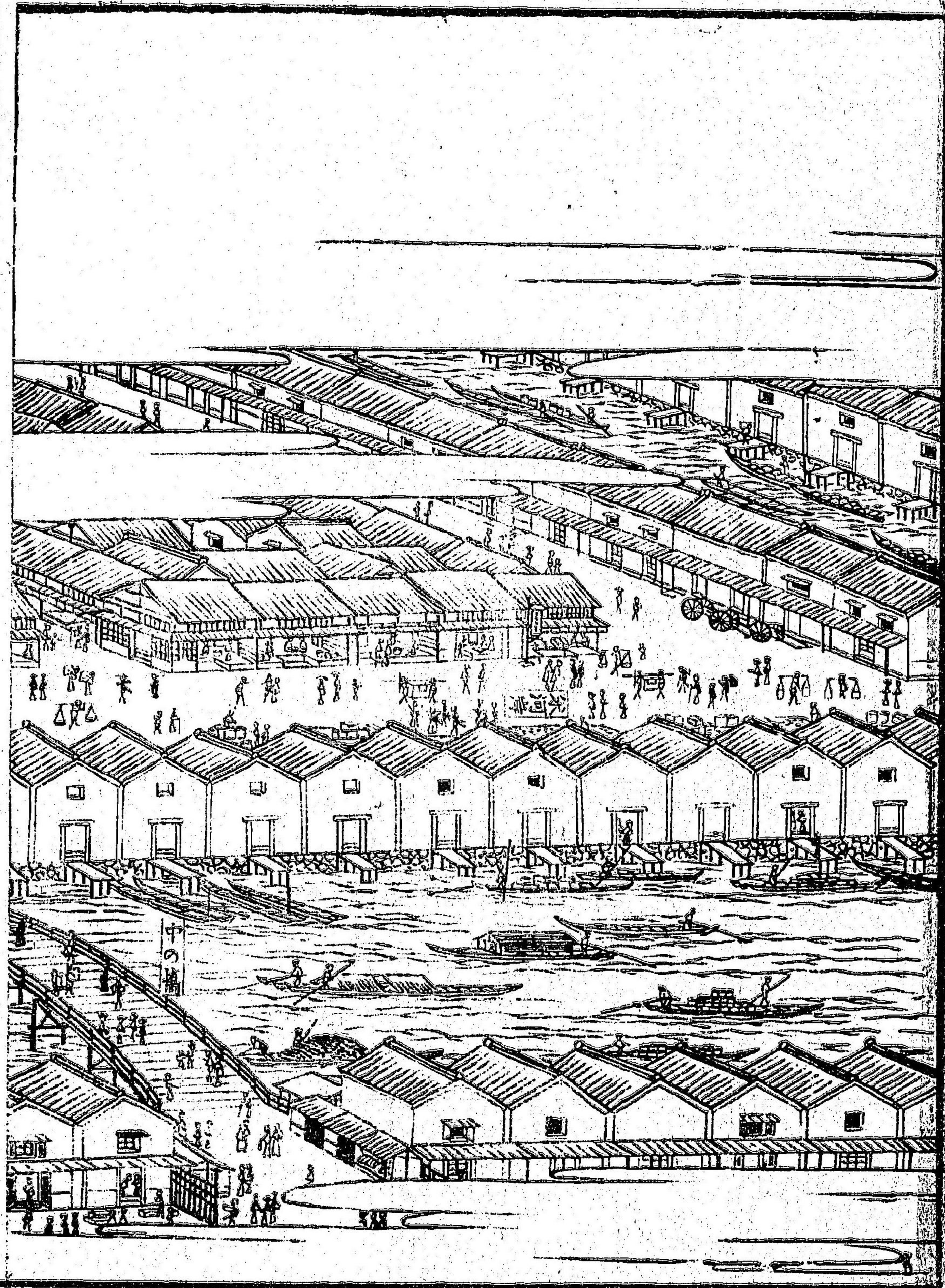
天王御祭禮

天王御祭禮

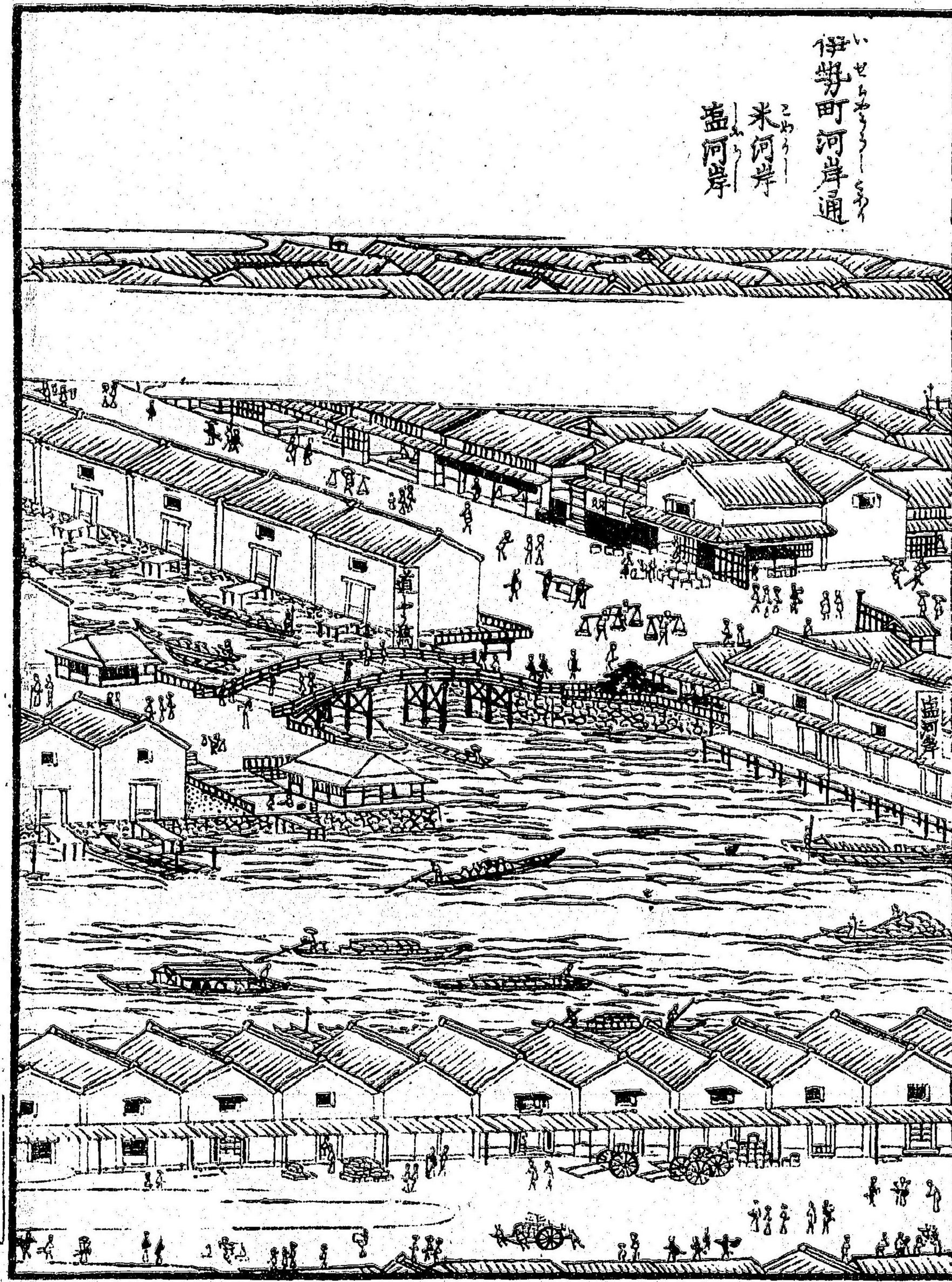


堀留





伊勢町河岸通
米河岸
塩河岸





按宝永七年十月十九日善願寺前より出火一石町のあり覺七す頃此

福田村舊跡 本石町一二町 本銀町一二町の辺其舊跡なりと云

傳 大久保主水屋敷内小福田村跡と稱す 其昔の里証宮邊某昔

千代田村舊跡 鑛炮町のあり昔の千代田村ありと云

千代田村舊跡より小社あり相殿一説訪明神と勸請す此地の里証宮邊某昔

寛正中大田道灌の弟千代田若松守の勸請なりと云此宮ハ

本銀町封疆 明暦年間火災を除く一のんふ是を築一む

今川橋 本銀町の大通より元乗物町へ渡橋を云此堀を神田堀

と号く元禄四年辛未堀割つることを頃此地の里証と今川某と

又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水

の宅ありたふある云り宅前より井あり主水井と云昔ハ茶の

水ありとせられしと云り 再按江府名跡志より一石橋の北の橋は

神田明神舊地 神田橋の内一橋跡館の中より又神田と号するハ

今存存と云り 陶年九月十五日祭の神輿を此辺旧名を芝崎

村と云 所領の中は江戸芝崎一と云各と注せり 其昔ハ浅草の日輪寺と

芝崎道場とのひく此地より又神田と号するハ傳へ云

往古諸國伊勢大神宮へ新稻をまゝるたる國中、稻を植る

の地あり是を神田或ハ神田神田と唱へしと云り此地ハ當國の

神田なり一故大已貴命ハ五穀の神なればと云ふ斎と云

神田明神と号けむと云ふ

神田橋 大手あり神田への出口ハ架を御門あり昔此地ハ土井大炊

の宅ありたふある云り宅前より井あり主水井と云昔ハ茶の

水ありとせられしと云り 再按江府名跡志より一石橋の北の橋は

神田明神舊地 神田橋の内一橋跡館の中より又神田と号するハ

今存存と云り 陶年九月十五日祭の神輿を此辺旧名を芝崎

村と云 所領の中は江戸芝崎一と云各と注せり 其昔ハ浅草の日輪寺と

芝崎道場とのひく此地より又神田と号するハ傳へ云

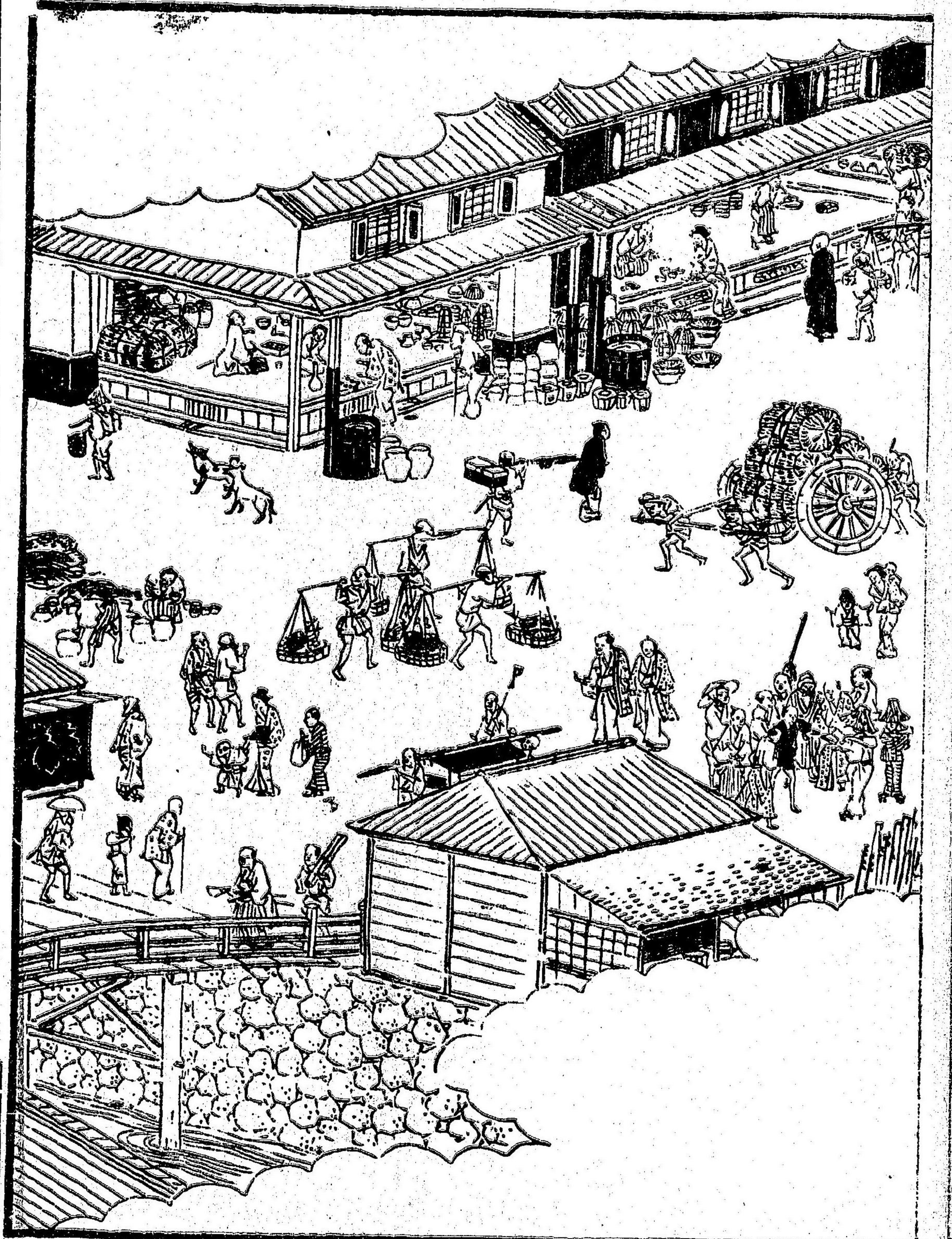
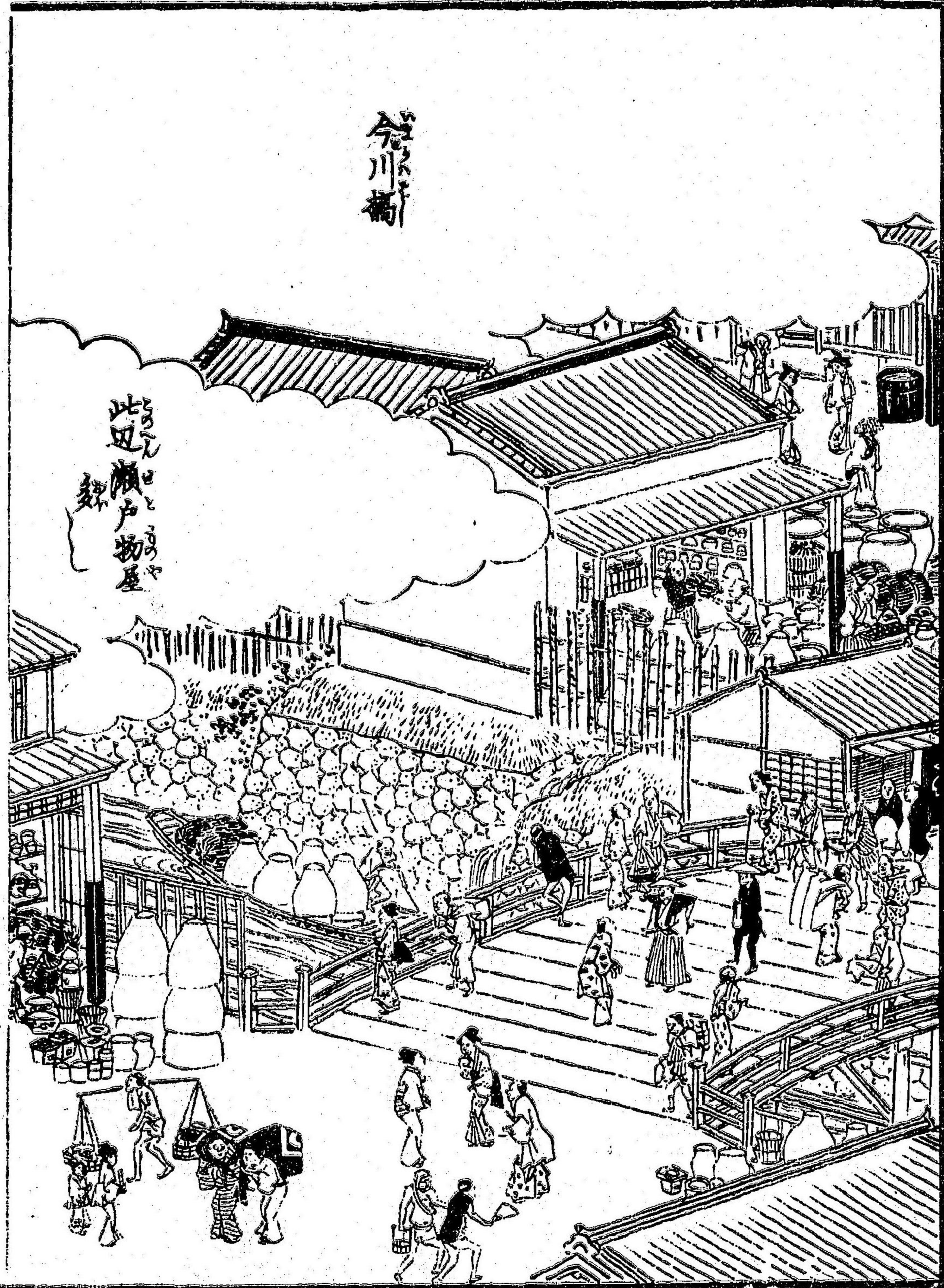
往古諸國伊勢大神宮へ新稻をまゝるたる國中、稻を植る

の地あり是を神田或ハ神田神田と唱へしと云り此地ハ當國の

神田なり一故大已貴命ハ五穀の神なればと云ふ斎と云

今川橋

此辺は瀬戸物屋



主水井



侯の第宅あり一故ふ又大炊殿橋とも号するなり
橋の外小茅商人あまた住す今の千堀の茅場町是なり又千後此所門は
外の町をまぐる神田と号く

護持院舊地 神田橋と一橋との間沙溝の外の芝生を云此所を

大塚護持院の舊址なり 元禄年間神原の南にあり一知足と引

田録の護持院の地へ 林泉の形残すも頗る佳景なり夏秋の間は是を

雨うせしと都下の人々小遊ふをゆるさる冬春の間ハ時として

大將軍家々々沙遊獵あり故に此所を新駒原とも唱ふ

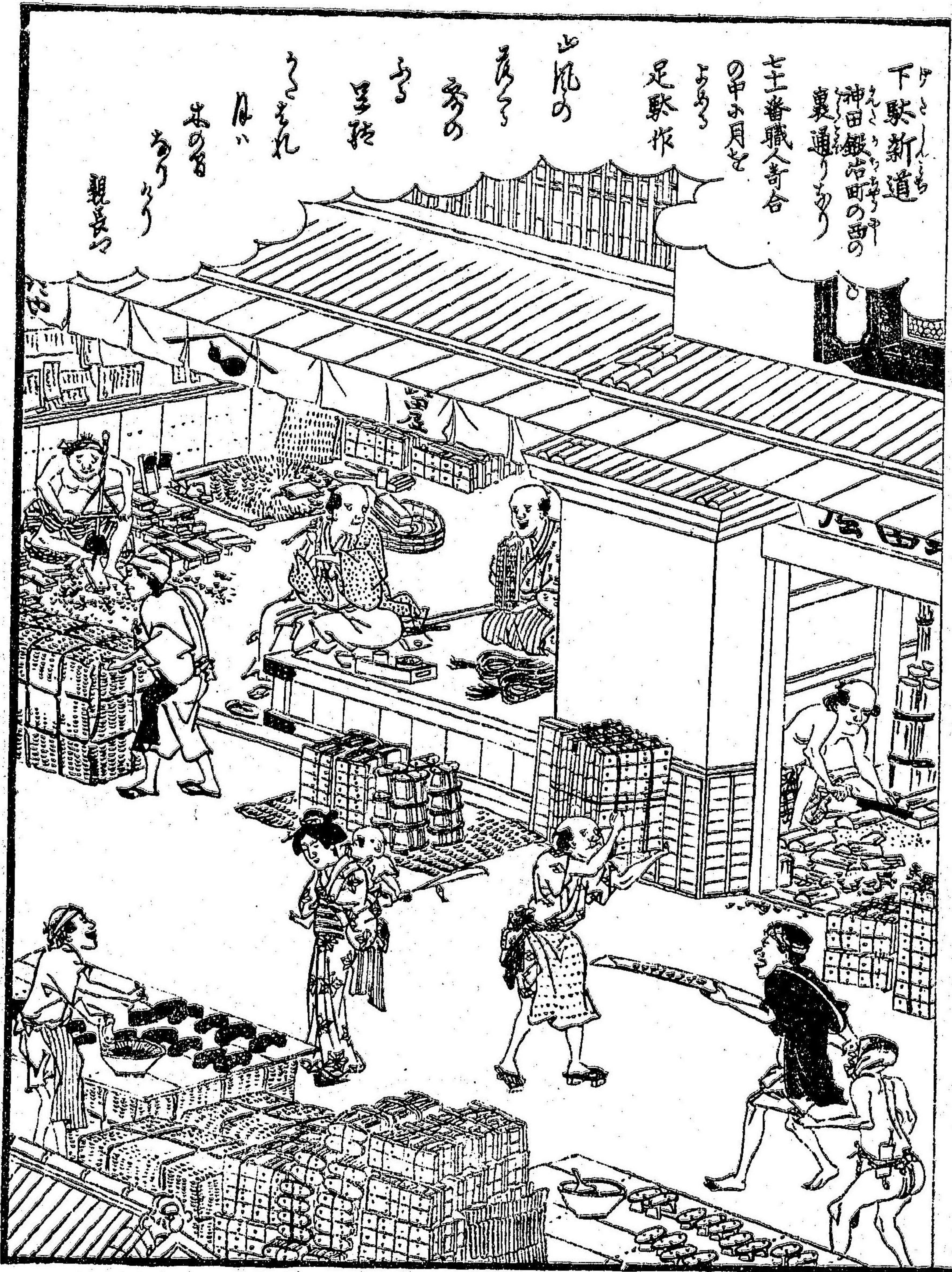
とあり世俗ハ護持院の系と呼ぶ

瓶ヶ淵 元飯田町の東の入堀をあら号く蟋蟀橋と云ハ同所北の

方の小溝は架を石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふ所の

橋を今魚板橋と唱ふ又組橋とされとす所以と云ふは江戸名勝志

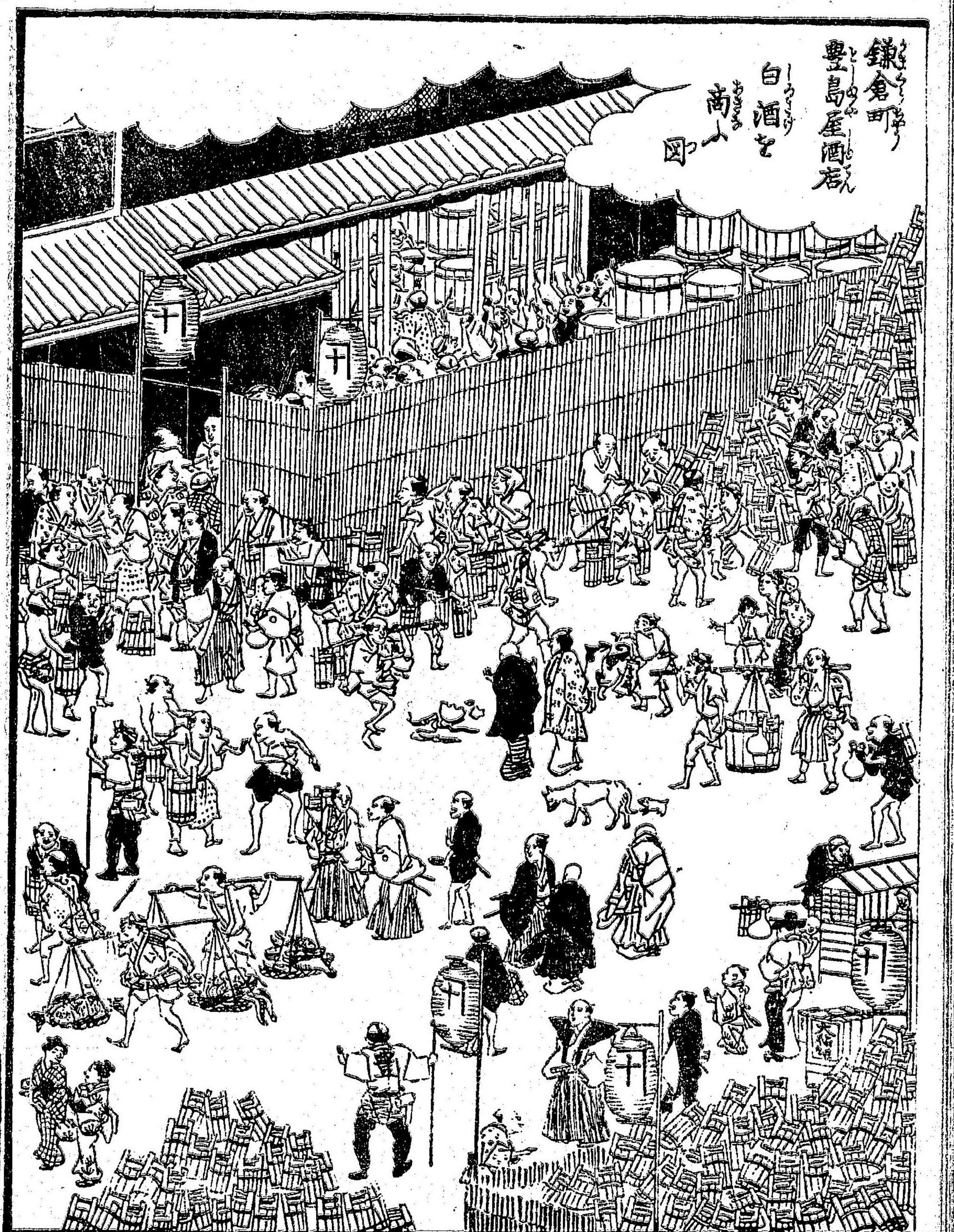
田川と云ふ 世継稻荷ハ飯田町の中坂は阿を文安の頃より此地に

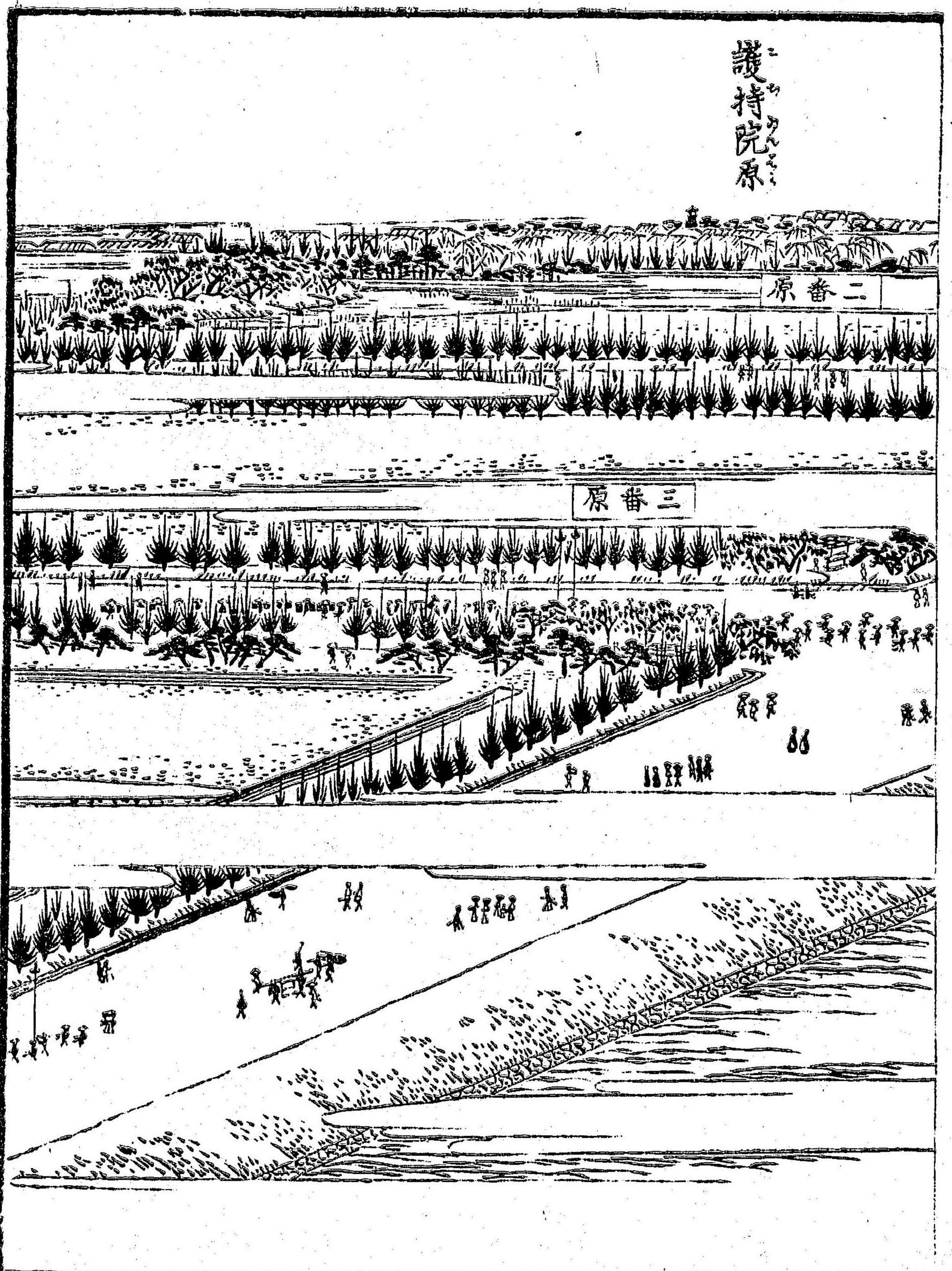
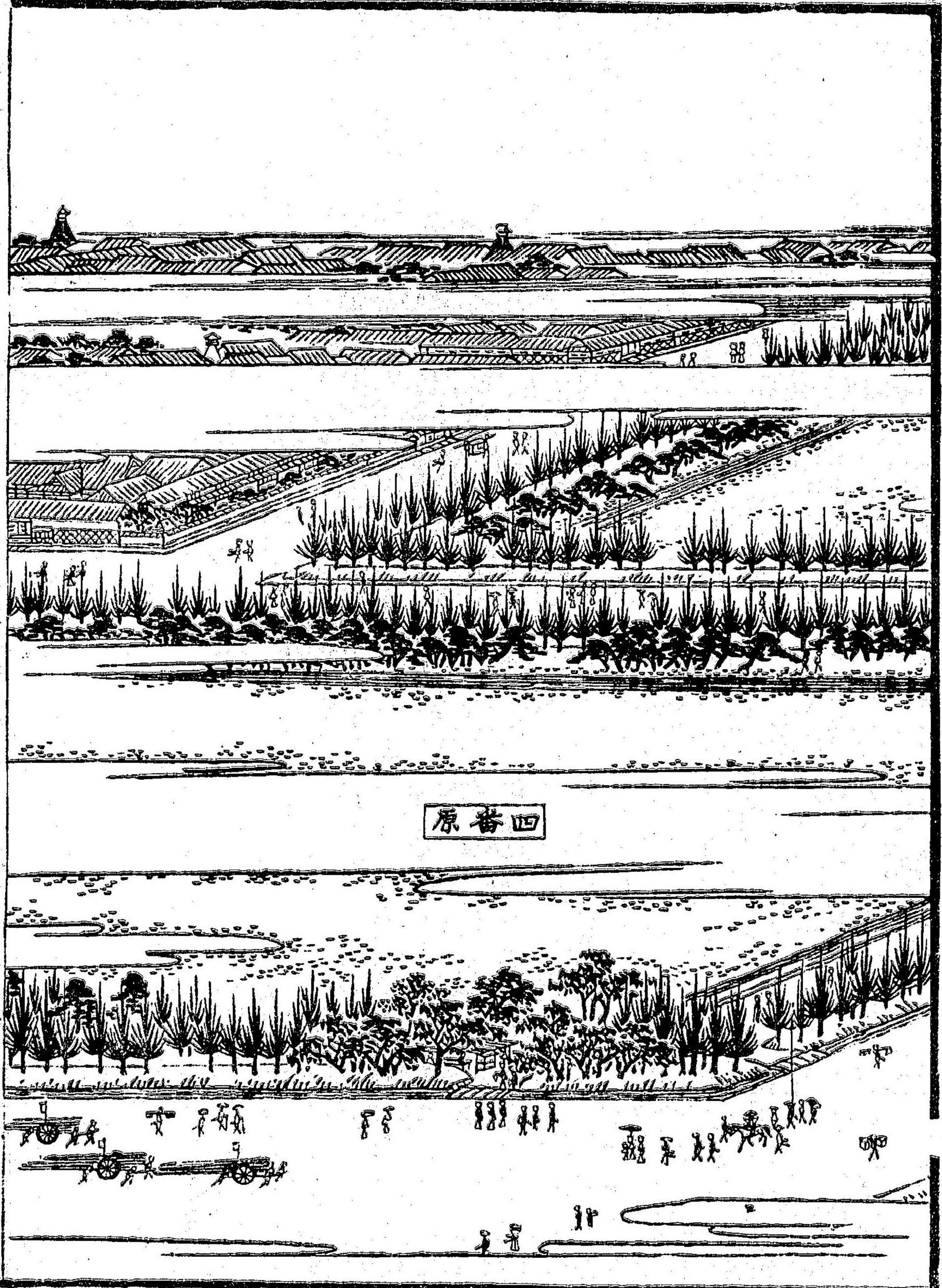


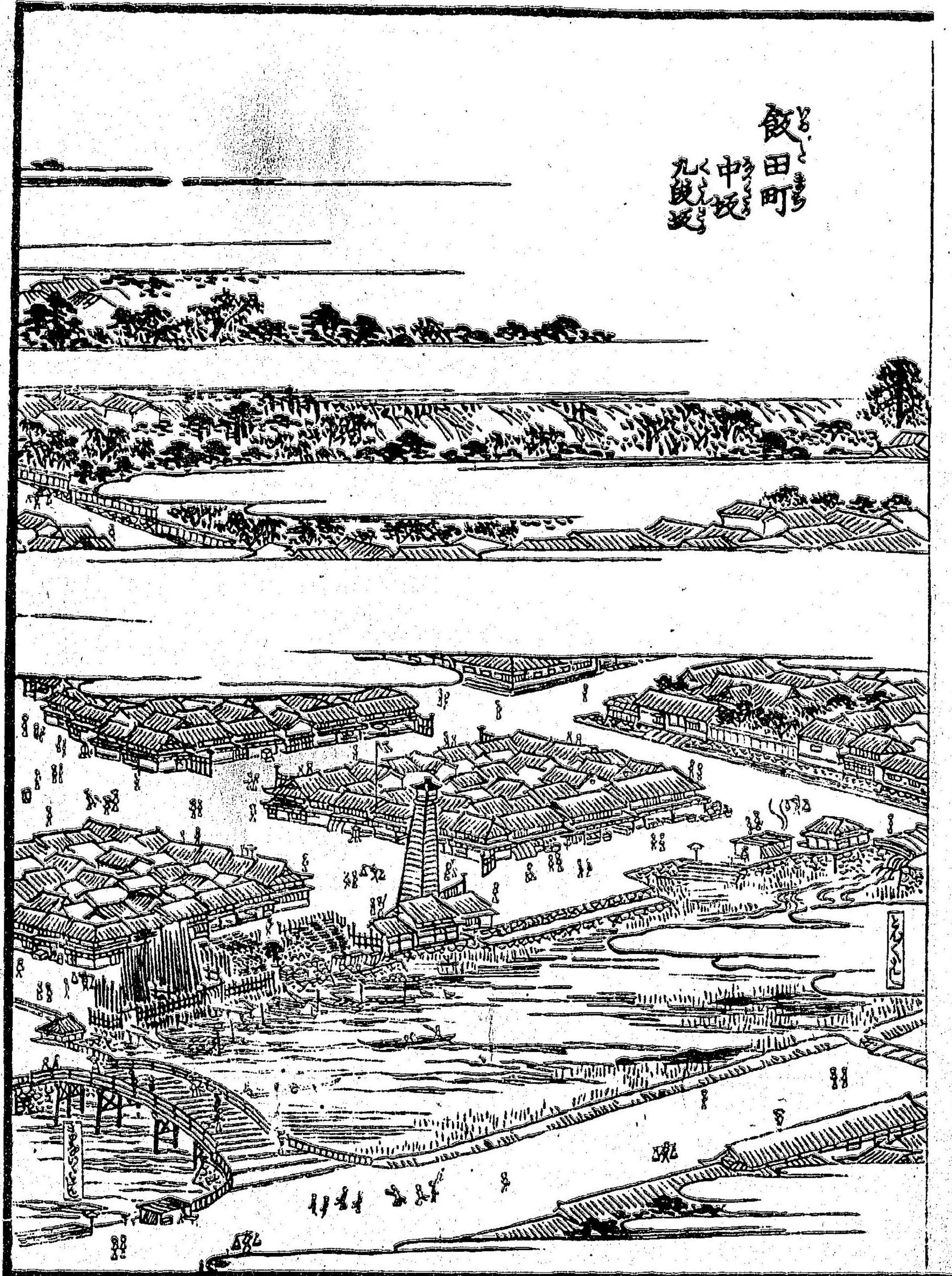
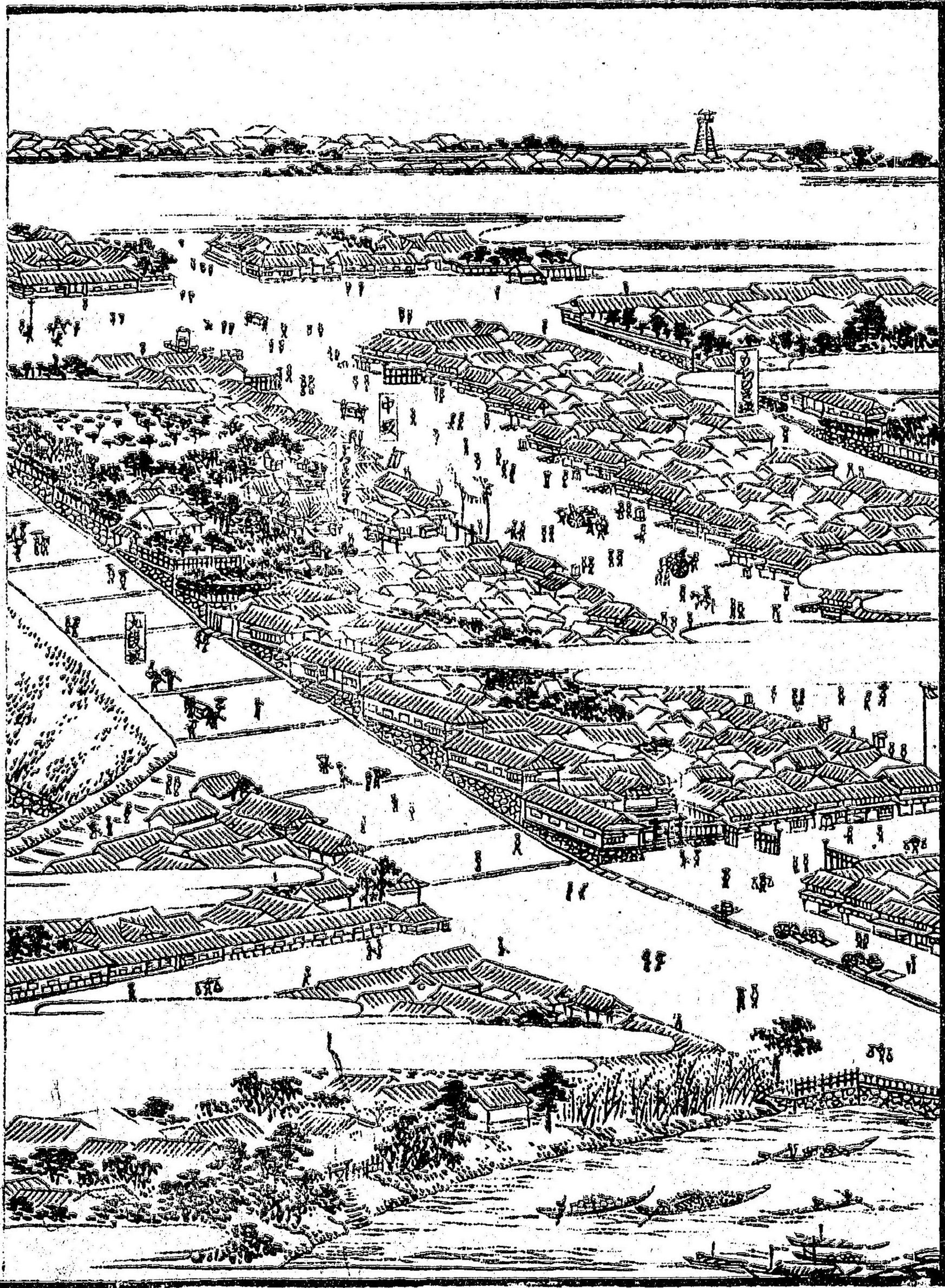
鎮座ありと云傳ふ 鞍向亭云く天正の始のころに神田の結構出来し
 其頃ハ市谷長圓寺谷ハ大橋あり今この揚場町昔ハ船河原と云其船河
 原の辺の沼水流とて此入堀の所へ續きしと云又小石川根木俣橋の下の水
 流も三崎指荷の辺より川町とて一橋より小石川東南へより流るると云
 讀波の南の方の小溝の石橋を袖指橋と云へり小石川の水
 関東古戦録 太田道灌は平井あり一頃馳望の如く
 此川は小川の傍に流るる根をわたりしと云れ

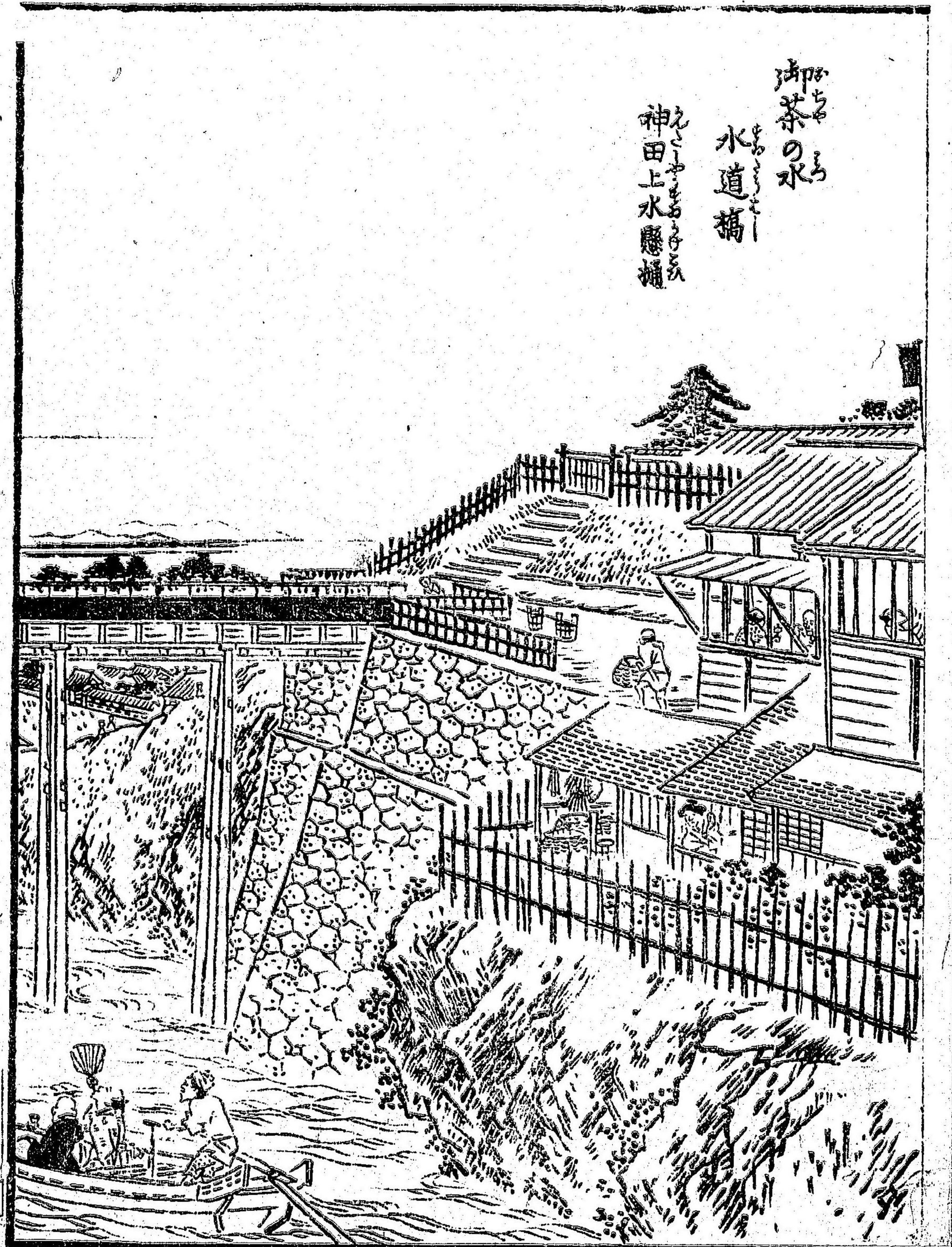
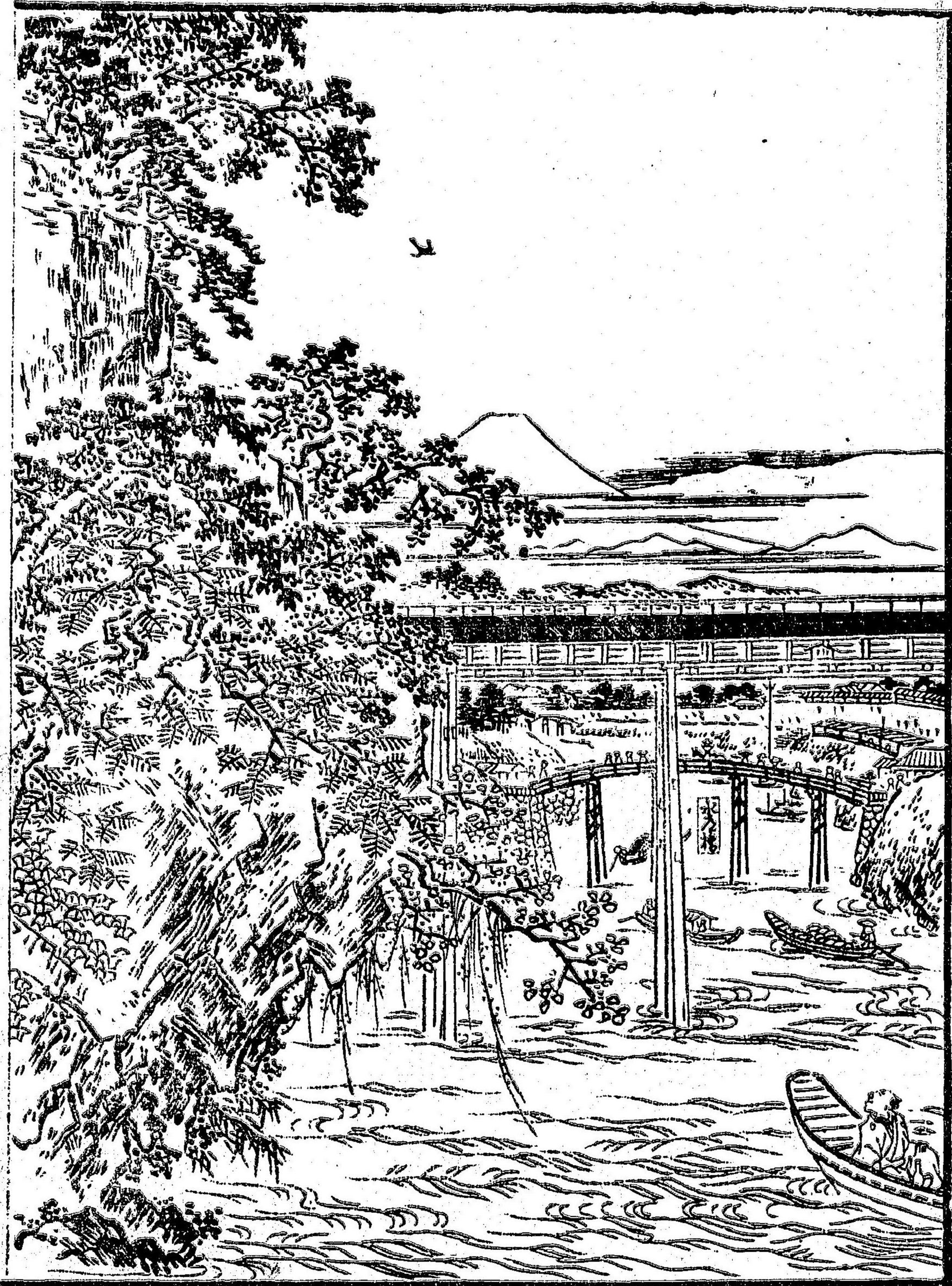
此詠風調ののりて云はす 神田の清川と号するものハ川町内藤大和彦の庭中ハ藤
 菊岡沾斎の説なり江戸名勝志云く神田ハ内藤大和守の
 内よりありしと云ふ小川の清水と云なり即神田明神の
 神田明神中古の旧地と云ふなり 神田ハ松平備前彦の
 根是混雑せしあり

田安の臺 元飯田町九段坂の上田安明神の辺とて東南の方と
 斜に見下しく佳景の地なり此所ハ祭土明神の舊地あり半込
 御門の内米倉家の所なり此構の前ハ大榎一株あり昔の神
 木ありと云傳ふ祭土明神昔ハ此地ありと云田安明神と称す









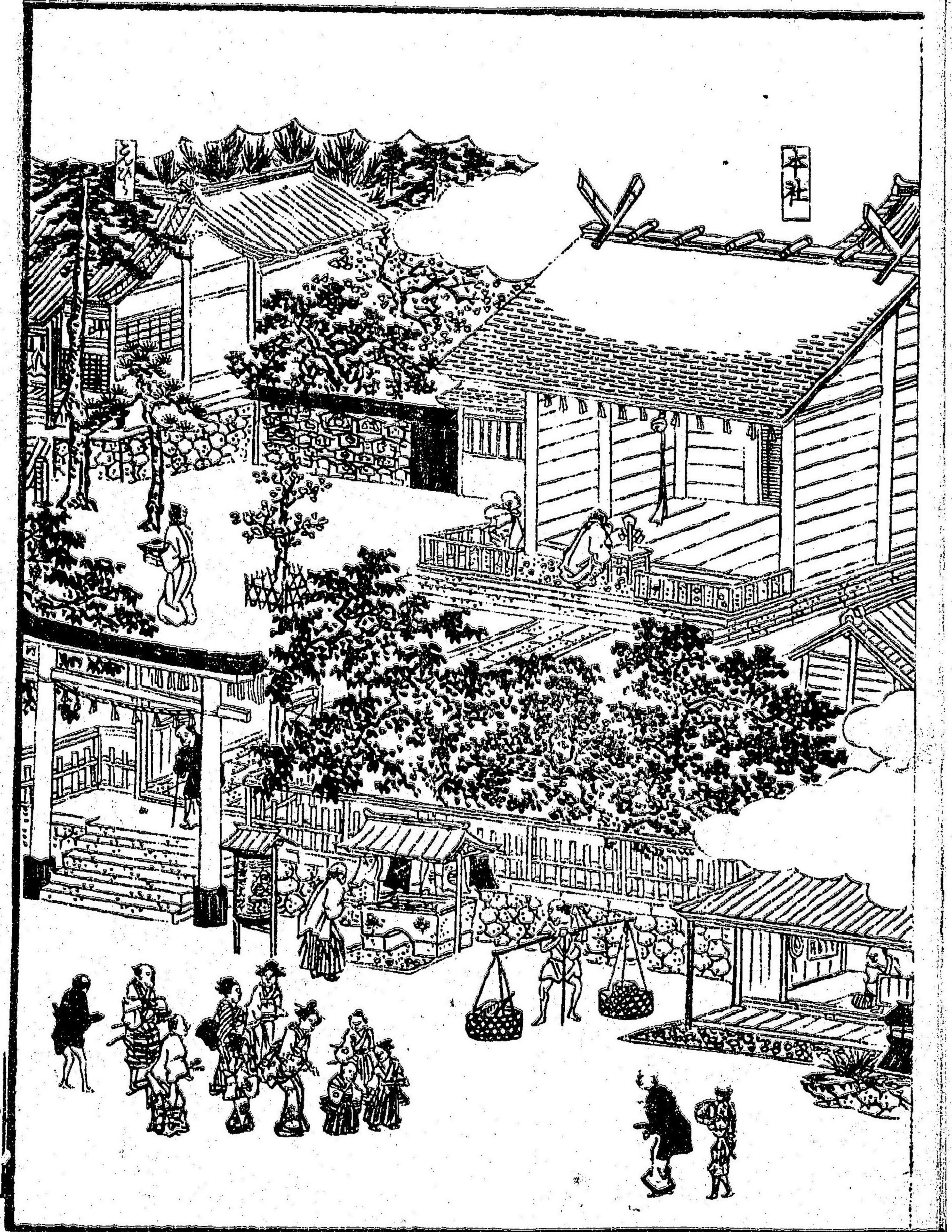
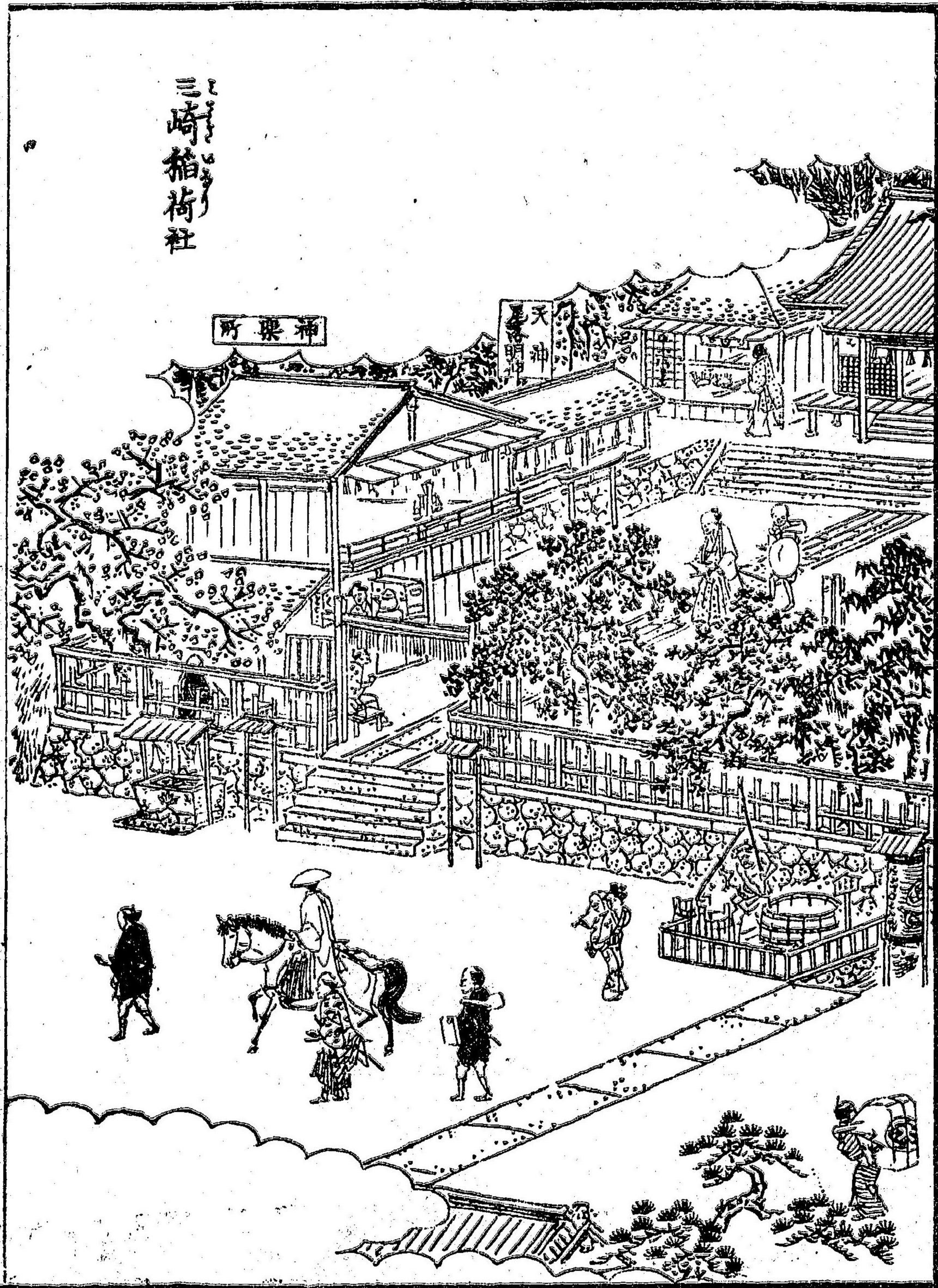
御茶の水
水道橋
神田上水懸樋

三崎柏荷社

所樂神

天神

本社



たるとなり

水道橋 小川町より小石川への出口神田川の流は架を此橋の火

下の方小神田上水の懸樋あり故に号とす

萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地あり其表門の通り

ありしとて此橋の舊名を吉祥寺橋とす

西の方土堤は傍てあり此社ある故南の街を稻荷小路と号く

社記云當社ハ古の勸請ゆか神代不詳近く天文七年小田原北条氏綱比

河臺 昔ハ神田の臺と云此所より富士峯と望むは掌に

現る如し故に此名ありとす

筋違橋 源田町より下谷への出口中々神田川は架を所門あり

此所より津高北を建り此前の大路をハッ小路の辻と号す

昌平橋ハ是より西の方小並入湯島の地ハ聖堂浄造營あり

一より魯の昌平郷は比しと号けられしなり初ハ相生橋

わくわく一橋又芋洗橋とも号しより一より太田姫稻荷の

祠ハ此地於路坂の上あり旧名を一口稻荷と称す

新國會ハ又東小柳森稻荷社あり並に拾遺

神田川 江戸川の下流中々湯島聖堂の下を東へ流大川

入明曆より万治の頃小至り仙臺彦 台命を奉り湯島

の臺を堀割小石川の水を初てらふ落とすと云傳つる

少く誤る小似たり古老の説ハ慶長年間駿河臺の地開け

一取小至り水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけし

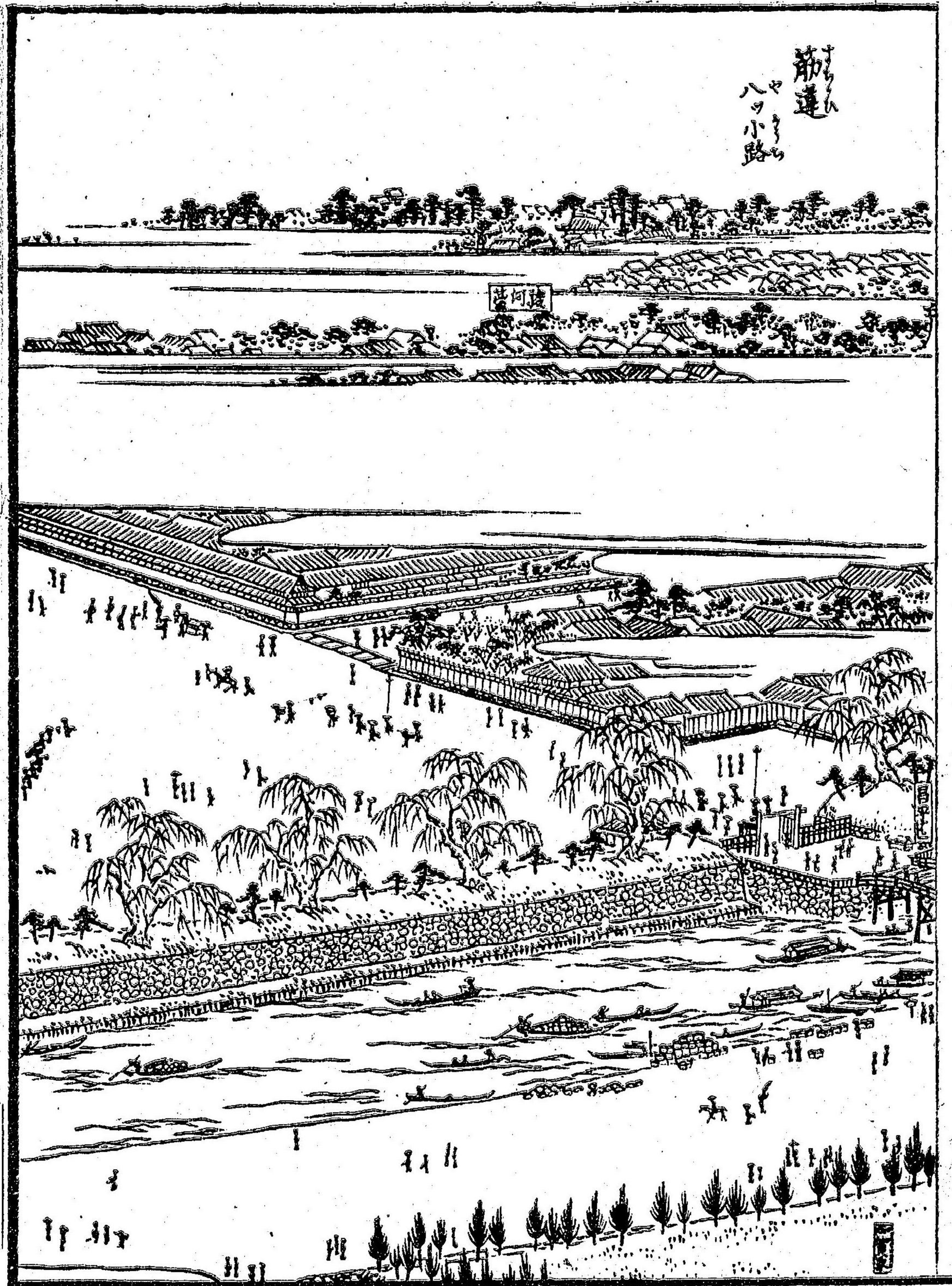
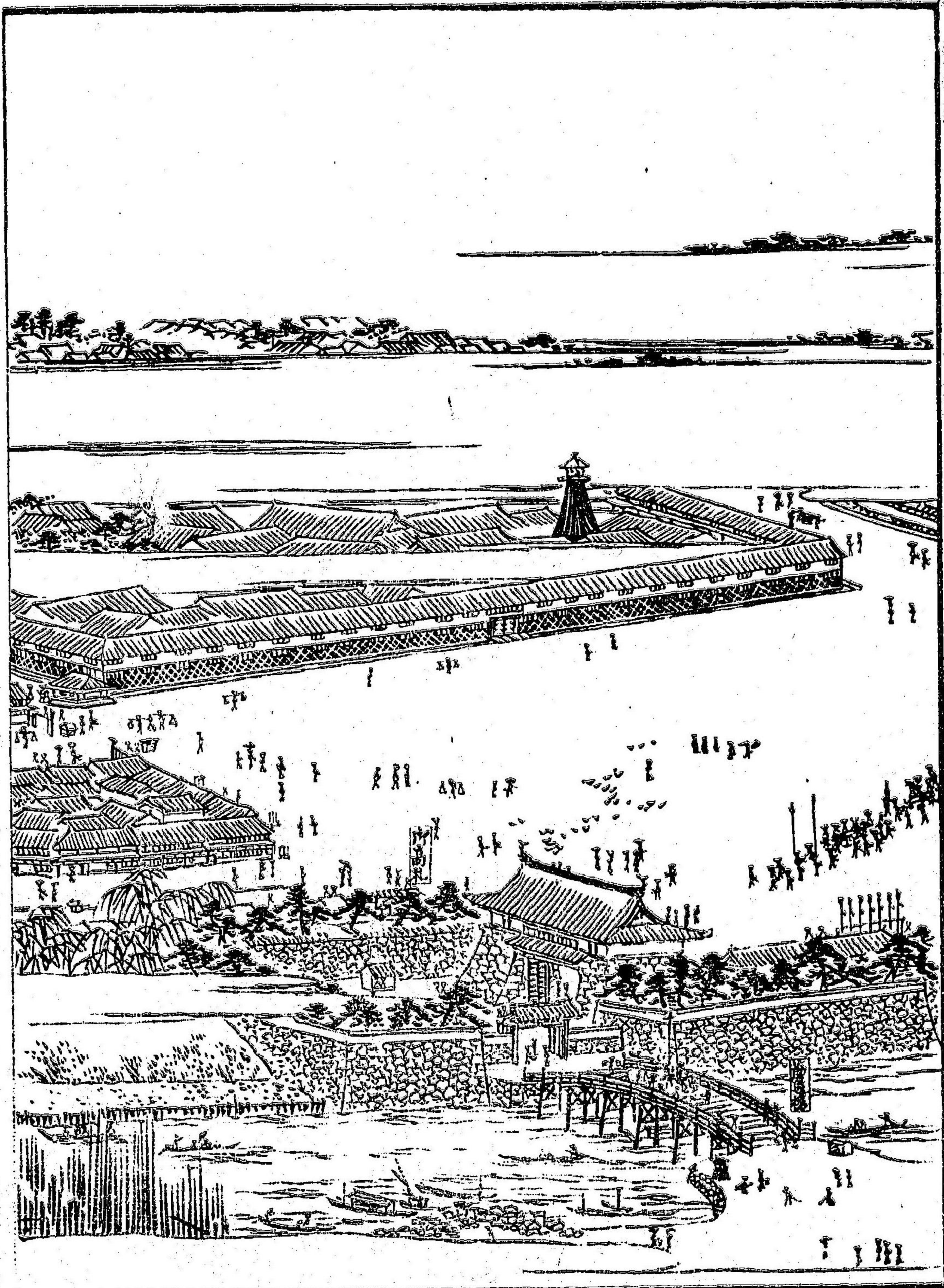
其土を以て土堤を築き内外の隔とす

へきみ似たり 昔ハ舟の通路を山臺彦命とすけたま

丹後殿前 雉子町の北の通りをの昔此地ハ堀丹後守殿の第宅

ありしとて唱へるを

寛永九年の江戸繪圖に因り考ふに今此津田山州彦の地則堀家のやききの跡あり





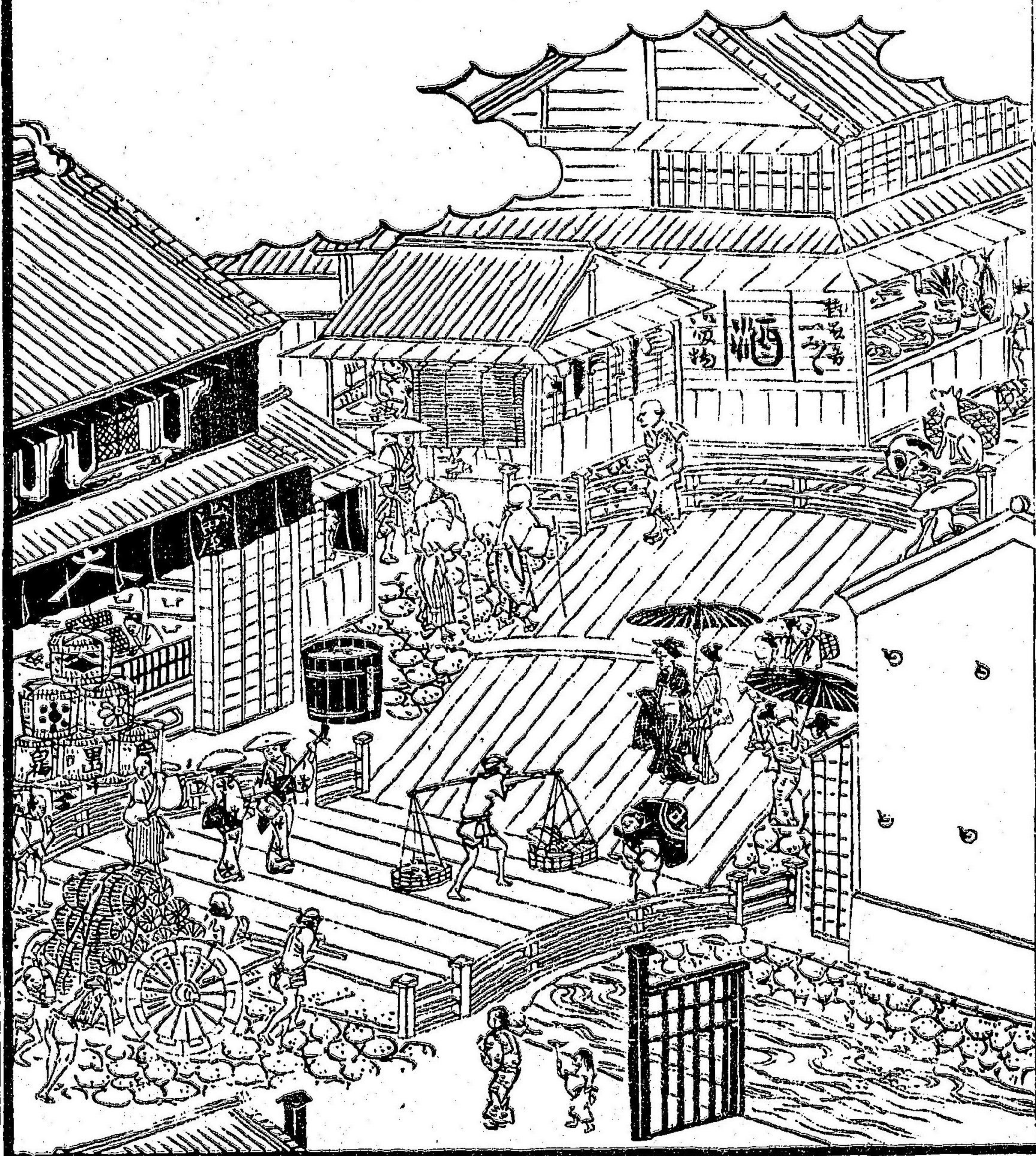
藍染川

其頃此辺の風呂屋小湯女を置いて客を招くより又六法組
 とて武夫中もあつた壯年の俠夫大小立髪の異風あり出立ゆく
 此風呂屋の辺を徘徊せしは是を丹前六法風と呼ぶ
 今も此地に清水屋堀川井云湯屋あり則昔の湯女風呂
 居ゆく狂言を取組名も丹前とよひるるなり
 白柄組 鉄棒組 唐犬組
 藍染川 神田鍛冶町の通を横よりく東の方へ流る溝あり里
 諺よ一町より上ゆく南北の水落合此所ゆく會流する故よ
 逢初と云の傍よと云又紺屋町の辺を流るあふ藍染川と
 云ととと
 常盤の侍女や代々自
 類を爲しあつたなり
 於玉池 舊名を櫻池と云今神田松枝町人家の後園に於玉
 稻荷と稱する小祠あり里諺よ云於玉の靈を鎮ると其傍よ

神前六法組 鶴鶴組

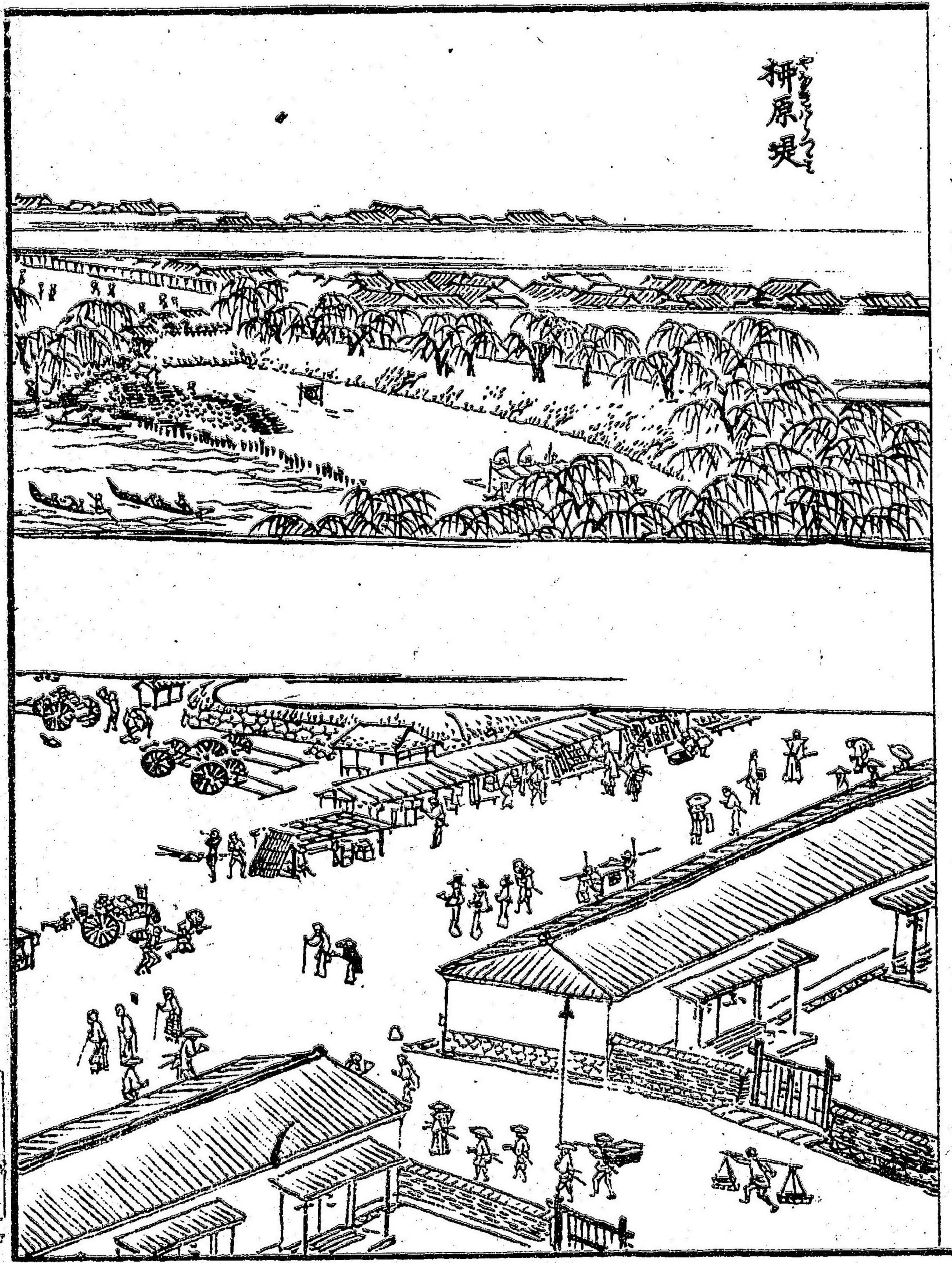


弁慶橋

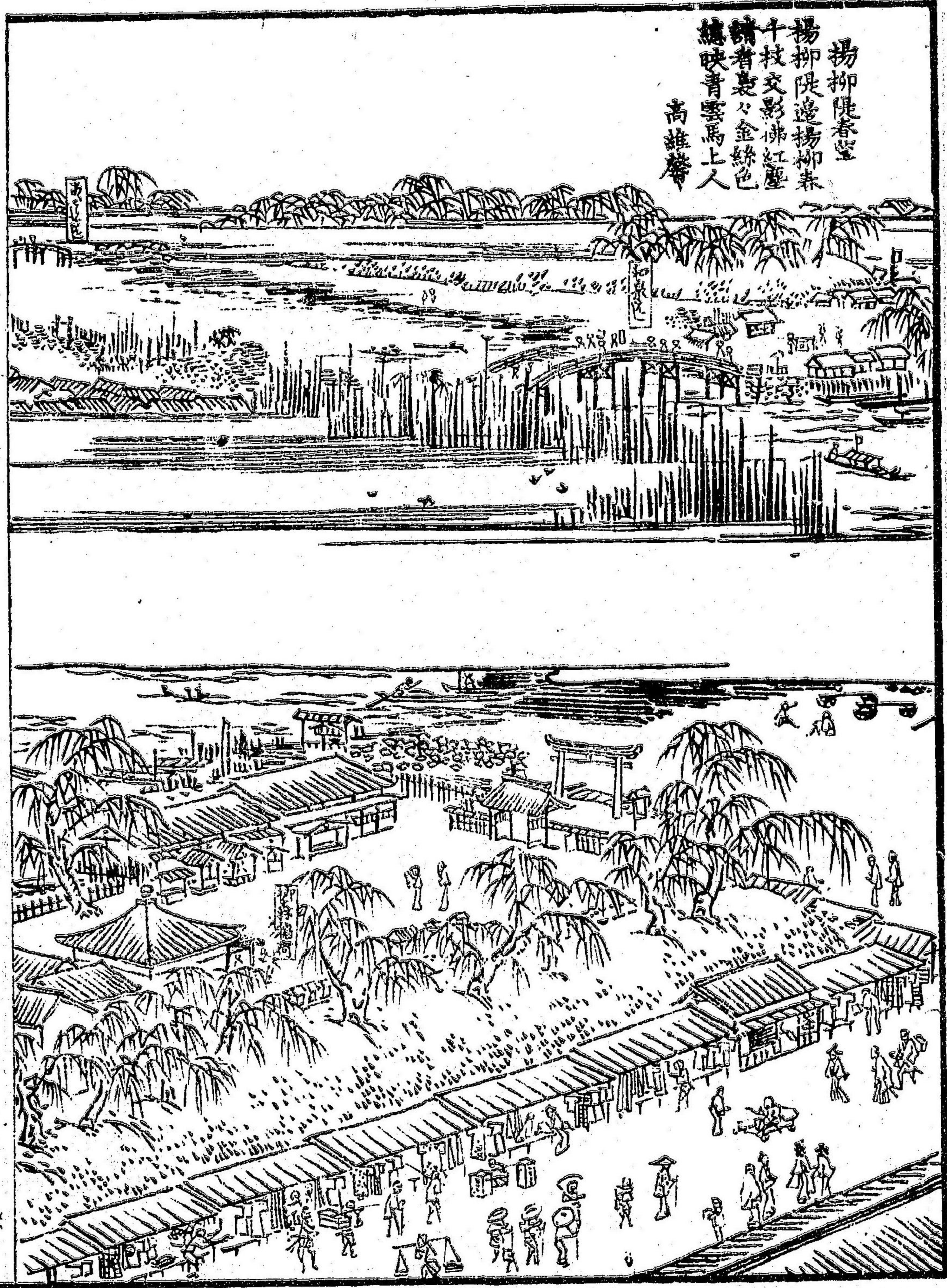


少く井の形残り昔の池の余波ありといふ
池の形残り昔の池の余波ありといふ
 里老傳云昔此地の奥州への通
里老傳云昔此地の奥州への通
 路ゆく櫻樹ありてはるるありてあり
路ゆく櫻樹ありてはるるありてあり
 とも其傍の櫻樹のともふ玉とてはるる女物居て往來の人よ茶を
とも其傍の櫻樹のともふ玉とてはるる女物居て往來の人よ茶を
 きむ容色たつてありてはるる心とありぬ旅人よ掛想せぬ
きむ容色たつてありてはるる心とありぬ旅人よ掛想せぬ
 たりきとてはるる中頃人とも品形もねはるるある男二人と
たりきとてはるる中頃人とも品形もねはるるある男二人と
 彼女よ心を通りせむるされハ切なる方やと思へともいひせり
彼女よ心を通りせむるされハ切なる方やと思へともいひせり
 まるるありてはるる我身のこゝろを思ひありてはるる女ハ終よ
まるるありてはるる我身のこゝろを思ひありてはるる女ハ終よ
 此池よ身を投ぐむやとてはるる津の國の求塚の古
此池よ身を投ぐむやとてはるる津の國の求塚の古
 りふ似くともありてはるる里民打寄るる七骸池比
りふ似くともありてはるる里民打寄るる七骸池比
 辺に埋みありてはるる柳を植るる記念の柳とハ号ると云
辺に埋みありてはるる柳を植るる記念の柳とハ号ると云
 其舊址明曆の雨録に記す今ハ名を呼ぶとてはるる
其舊址明曆の雨録に記す今ハ名を呼ぶとてはるる
 辨慶橋 同所東の方和泉橋の通藍赤川の下流よ架す其始

柳原堤



揚柳隄春望
千枝交影拂紅塵
晴者裏心金絲色
總映青雲馬上人
高維馨

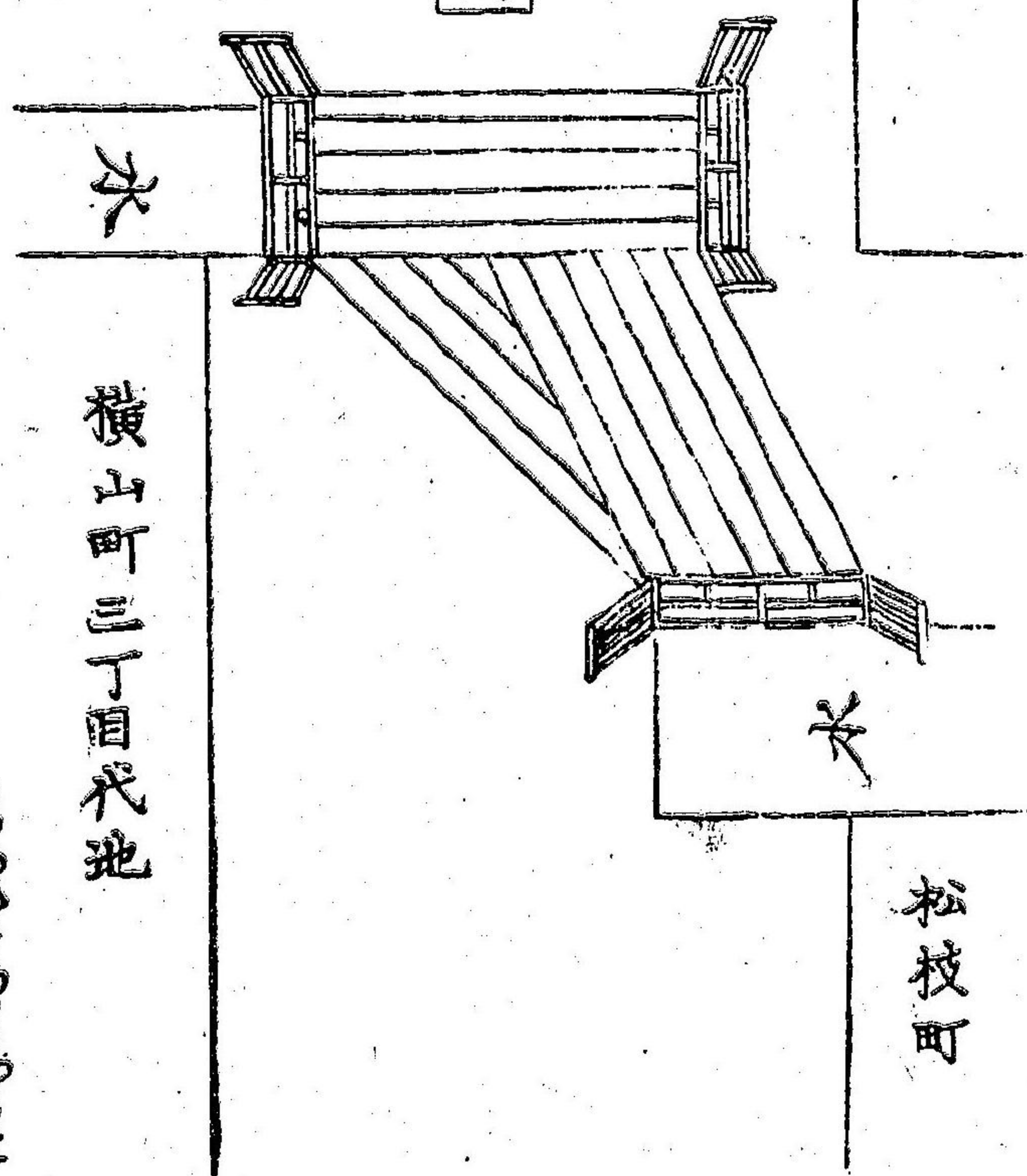


此天工棟梁辨慶小左衛門といふ人の工夫より懸初しと
 此地の形は應一欄を横切り筋替なる尤奇なり

岩本町

松枝町

辨慶橋之圖



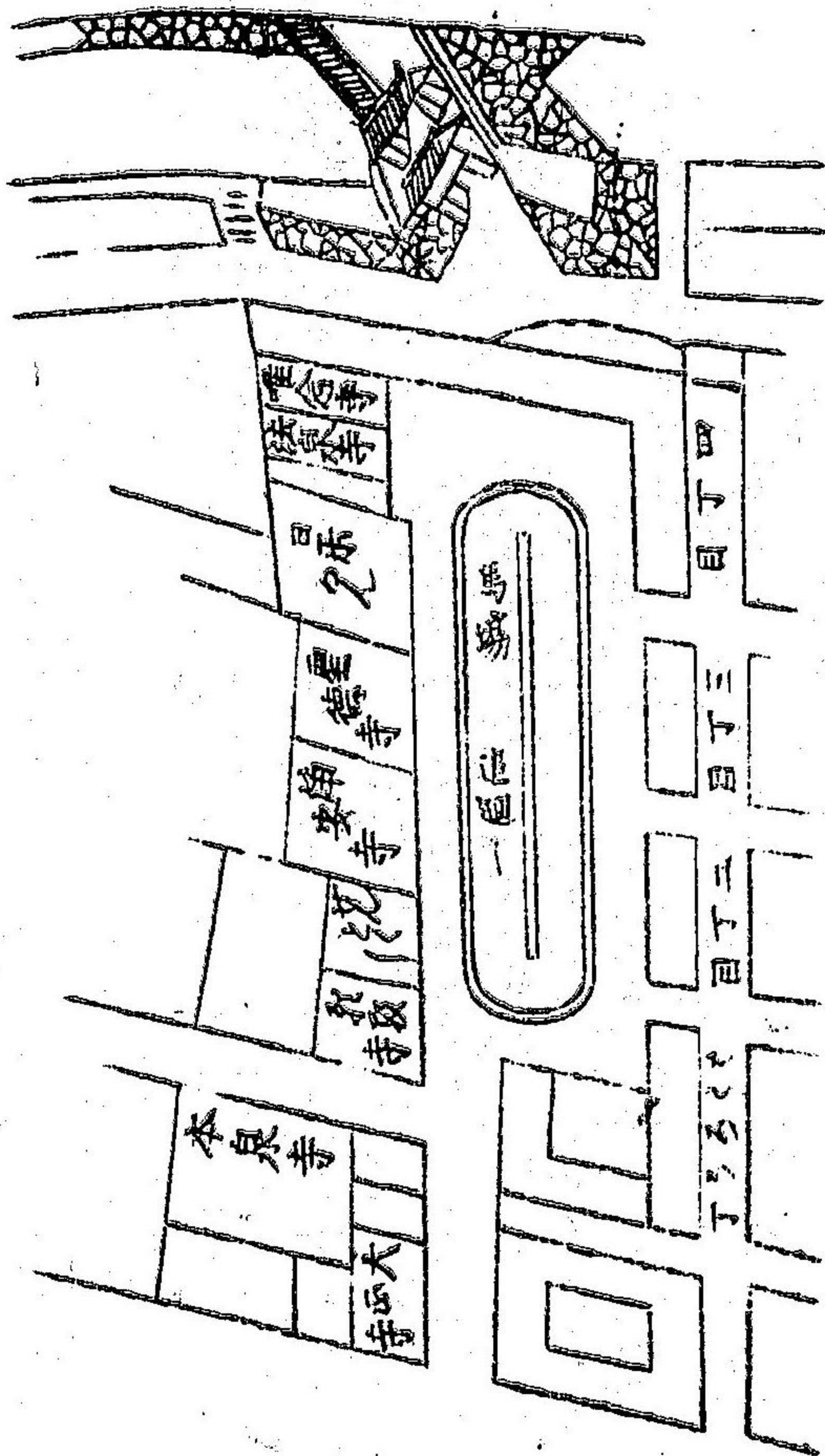
元岩井町

横山町三丁目代地

柳原封壇 筋違橋より浅草橋へ積く其間長凡十町あり
 享保年間此所の堤小悉く柳を栽せり
 堤の外は神田川なる又此堤の下は柳森稻荷と称する叢祠あり

故に此地を稻荷河岸と呼べり
 昔は神田川の隔ちあり此川の南北より
 馬場 馬喰町三丁目の西北の裏通あり江戸馬場の中最も古

慶長五年関原陣の時沙馬揃あり所なりと云傳ふ
 沙馬工郎高木源若衛是を預りたり
 此地を馬喰町といふ此地由緒あり
 寛永元年開校のありまありと云傳ふ
 寛永十一年の江戸繪圖
 寛永十一年の江戸繪圖
 寛永十一年の江戸繪圖



浅草橋 神田川の下流浅草沙門の入口は架を此所より御高札を建

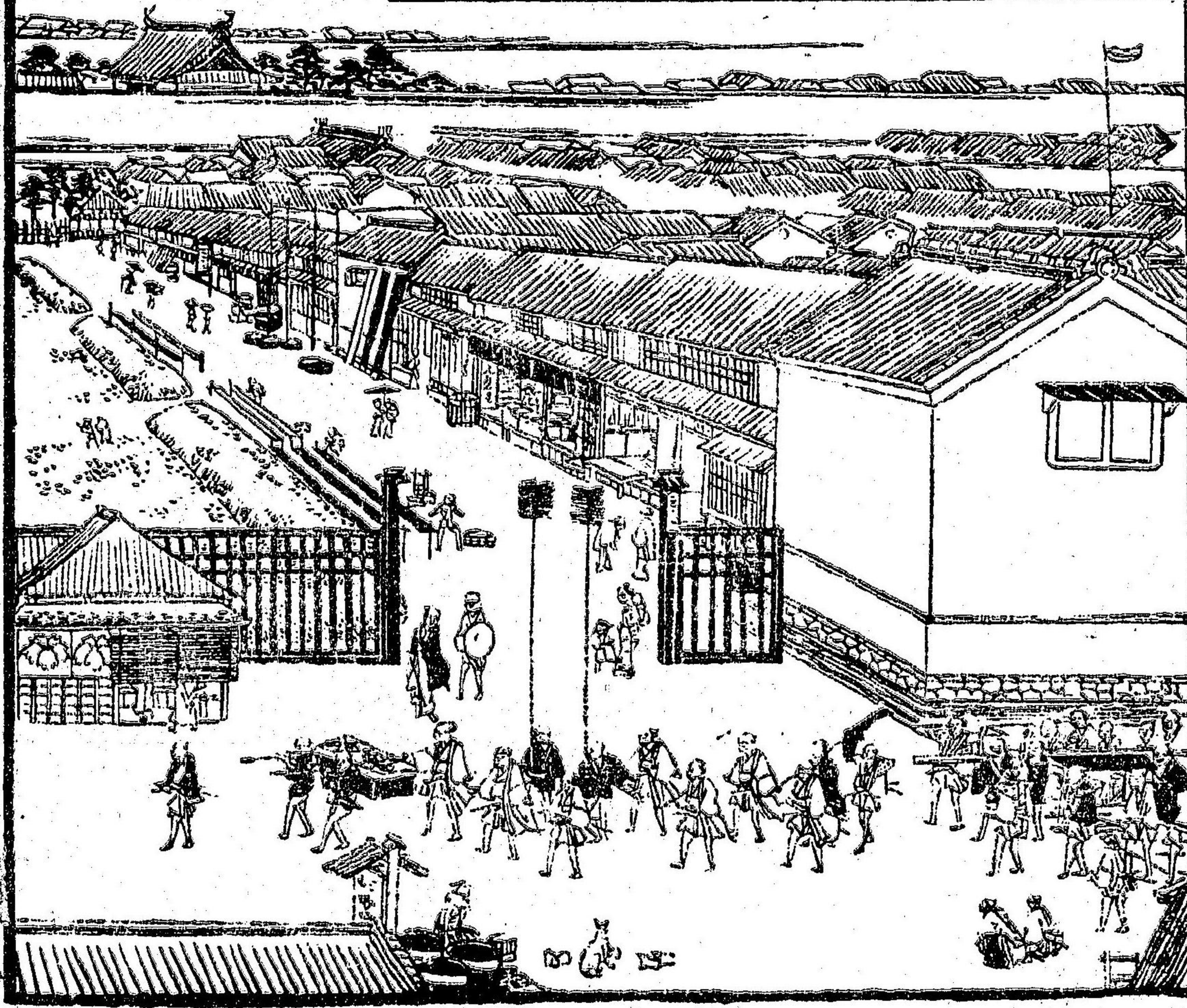
馬喰町馬場

鶴岡放生會職人町
博労邊

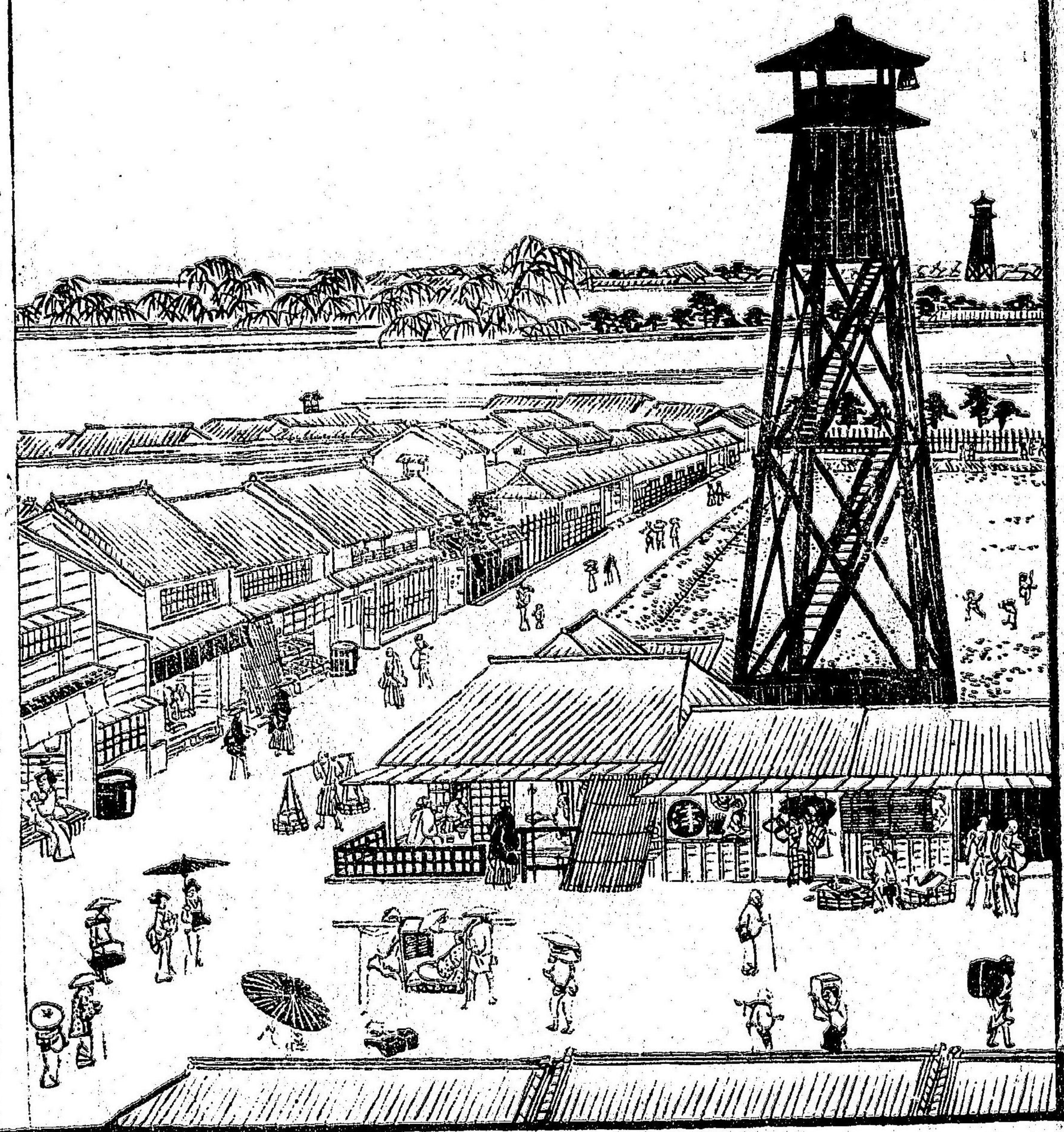
あまの
世の

ふふふふの
あまの

あまの
あまの



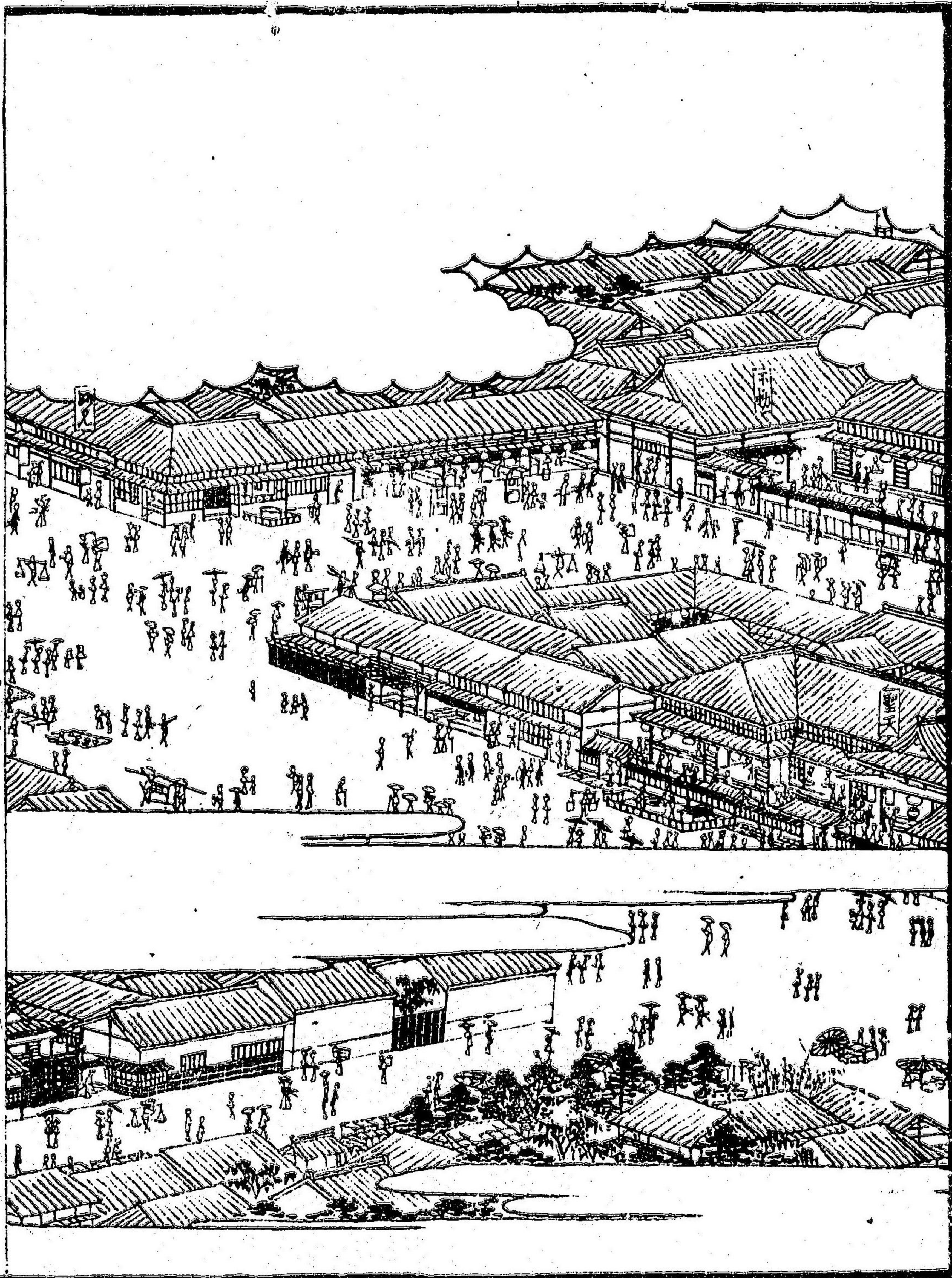
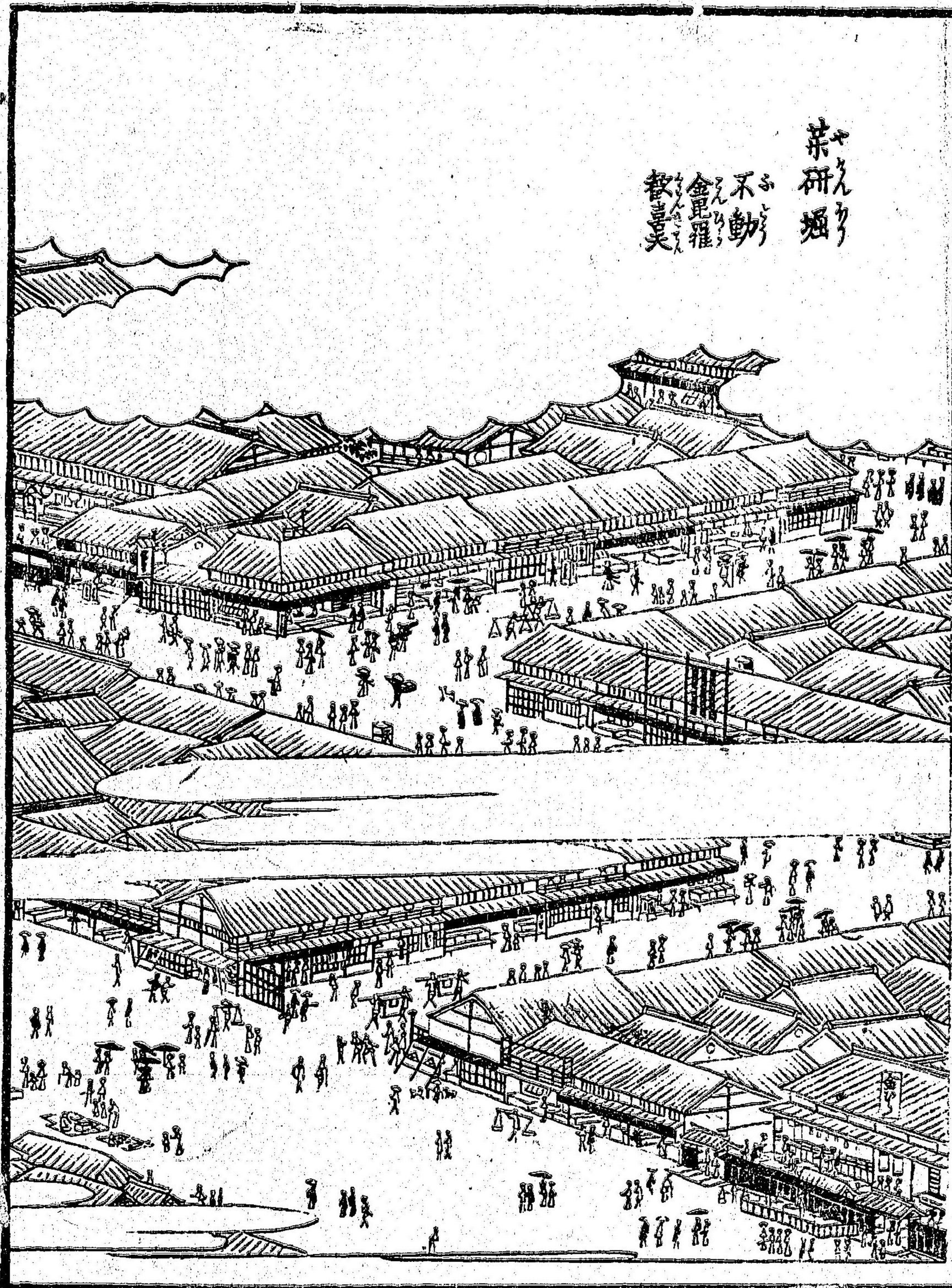
あまの
あまの
あまの





錦繪
 江戸の名産中て
 他邦無比の
 由中極彩色珠
 更なる其の
 ひやありて法
 不賞の美を
 戦

茶研烟
不
會
歡
美



らる馬喰町より浅草への出口や千住への官道なり此東の大
川口よかきと柳橋と号く柳原堤の末よあるある名とあると

兩國橋

浅草川の末吉川町と本所元町の間架長九十六間

寛文元年辛丑新兩國橋を築く事普請奉行芝山平内両氏余せ
られしと云く舊名を大橋と号け事跡合考は治二年東の大川筋に始て大
橋一所を架けりしとあるも此橋の形は扇を閉まざる事

其昔此川を國界とせしより兩國橋の号ありしと云く今
めく利根川を以界と定めしより凌ハ本所の地も同一く武蔵

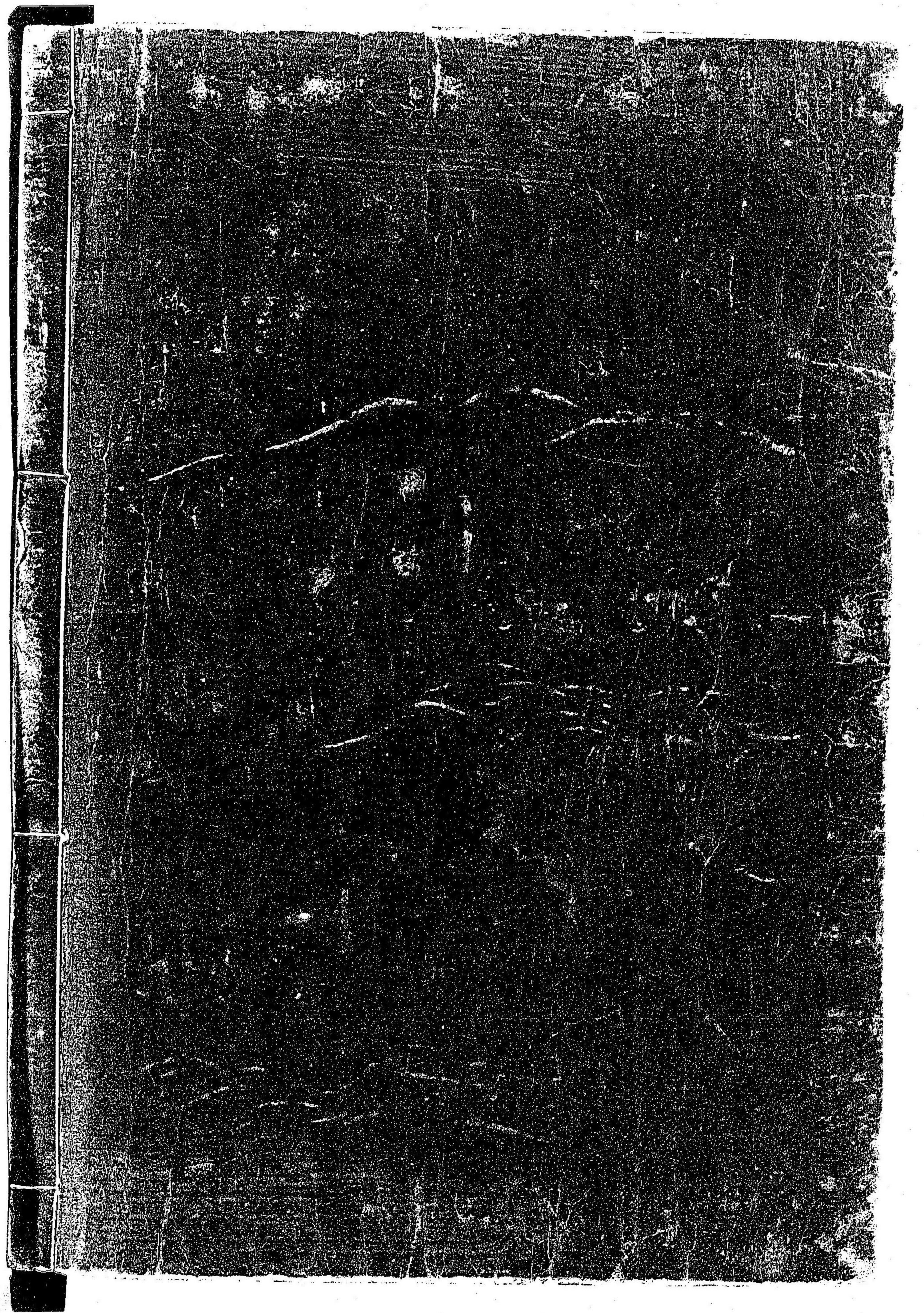
國に属せしと云く橋の号ハ唱へ来りし任せく平修改らる事と

なり我人云く貞享三年丙寅春三月利根川此地の納涼ハ五月廿八日

始り八月廿八日終る常々賑はる事と云く就中夏月の間ハ尤

盛なり陸中も觀場をせしめしと云く其招牌の幟ハ風ハ飄々

扇翹々り兩岸の飛樓高閣ハ大江に臨み茶亭の床ハ水辺に立



W245
20

300169-001-9

W245-20

江戸名所図会 7巻

斎藤長秋/編, 長谷川雪且/画

20冊

1893. 12

ADC-0001

